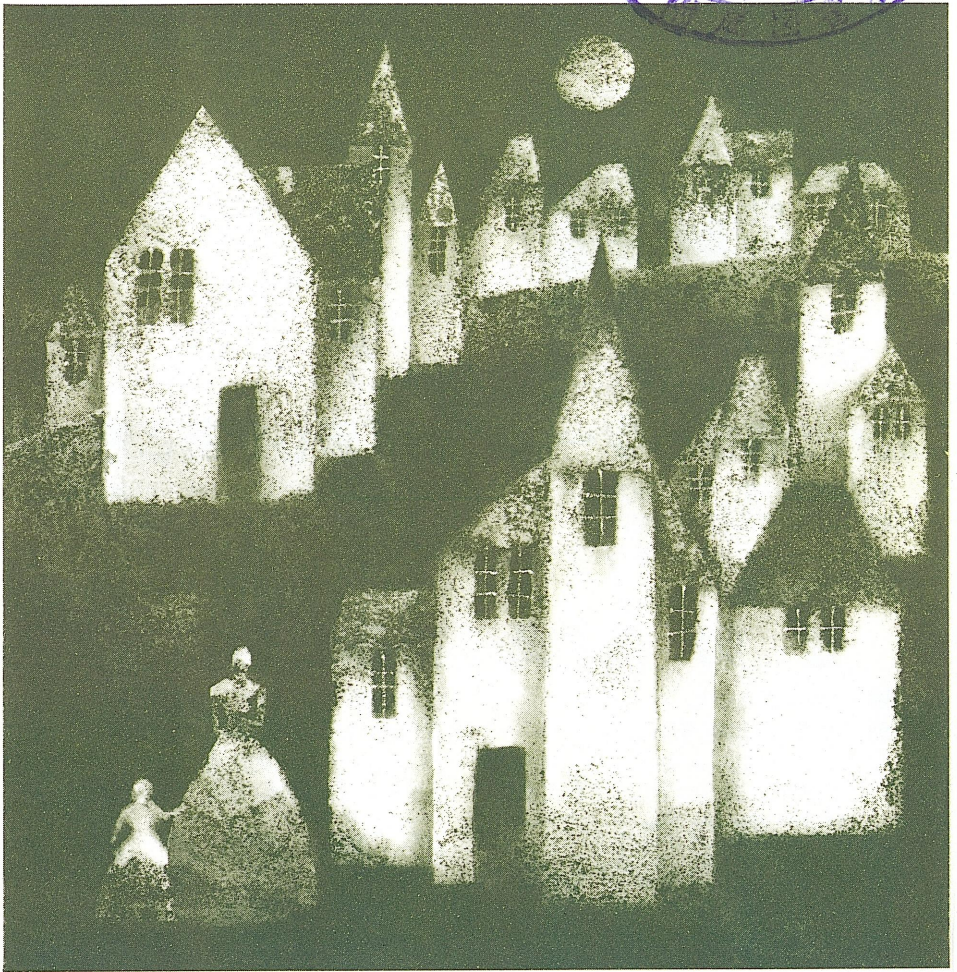


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

6



第七十九卷 第六号 日本幼稚園協会

お子さまの大好きなお話を
たくさん読んであげましょう!



子どもに話 読んで聞かせる話

全6巻 ケース入り セット価格 4,650円

子どもはお話が大好きです。とりわけ、先生やお母さんやお父さんが読んでくれるお話をとても喜んで聞きます。「ねえ、お話して」と子どもにせがまれた経験は、どなたもおもちでしょう。そんなときのために、「子どもに読んで聞かせる話」6冊セットを、是非、園文庫、家庭文庫に加えてください。

セット内容

ゴンとホットケーキ

作・村山桂子／絵・長 新太
A5判 132頁 750円 千160円

ウサギのハネールは毎日いたずらばかり。キツネのゴンは弱い者いじめを。さて……。

かぜのふえ

作・絵／やなせたかし
A5判 146頁 750円 千160円

幼児子どものための新しい創作民話。現代に生きる子どもたちに愛とやさしさを伝えます。

まいごになった きゆうこうれっしゃ

作・前川康男／絵・織茂恭子
A5判 192頁 900円 千200円

仲良し兄弟2人がケンカや遊びを通して成長していく姿は子どもたちに共感を与えます。

おすましがあこちゃん

作・わたりむつこ／絵・山本かずこ
A5判 136頁 750円 千160円

ちよつびりおませでかわいいあひるのがあこは、幼い子どもの生活そのものです。

こぶたのふうくん

作・小沢 正／絵・渡辺有一
A5判 136頁 750円 千160円

こぶたのふうくんが公園に遊びに行くとき次々に不思議な事件が。さて、ふうくんは……。

くまのくまた

作・絵／さとうわきこ
A5判 144頁 750円 千160円

くいしんぼうのくまたが考えることは食べ物のことばかり。食べ物をめぐる愉快な話。

くわしくは、フレール館代理店・支社・支店・営業所・特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレール館

幼児の教育

第七十九卷 第六号



幼児の教育 目次

——第七十九卷 六月号——

表紙 駒宮録郎
カット 中島英子

幼児の生活と行事……………神沢良輔…(4)

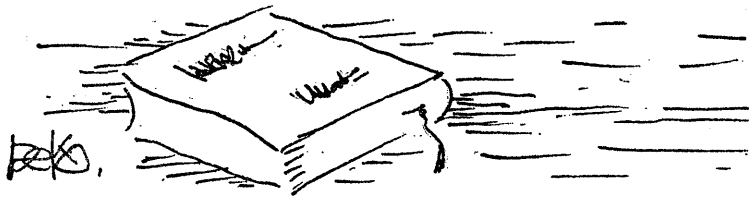
幼稚園の定員を考える……………立川多恵子…(8)

京阪神聯合保育会雑誌(2)

——時代的な内容の変遷——…水野浩志…(14)

食べる……………長山篤子…(22)

遊びの中の「食べる」こと……………入江礼子…(24)



母と娘……………野田幸江(26)

倉橋惣三への一つの接近(その二)

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」

の多層性……………本田和子(28)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十一)……………海老沢敏(34)

わたくしのシルクロード②……………横張和子(42)

遊びと子どもの発達⑤……………加古里子(46)

現職研究レポート その四 M幼稚園の場合……………太田留美(50)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究(三十四)——……………津守真(56)

編集委員 中村英勝・守永英子

本田和子・永井正子

編集主任 津守真・皆川美恵子

幼児の生活と行事

神 沢 良 輔

(一)

最近、わが国の保育内容の変遷について見直す機会に恵まれた。そこで改めて気づいたことの一つに「行事」という問題があった。

すくなくとも、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に附属幼稚園が創立（明治九年）されて以来、保育内容は、戦前の保育課（科）目、保育項目（明治三

十二年の幼稚園保育及設備規程では、遊戯、唱歌、談話、手技の四項目、大正十五年の幼稚園令では、それに観察が加わり五項目）の時代を経て、戦後は、保育要領（昭和二十二年度、幼稚園教育要領（昭和三十一年、三十九年）というように、いろいろとその時代の要請により、公的なものは、示し方や考え方、方法、内容に変化のあるものの、その中で、表面にはあまり出ず、しかも実際の保育内容として、きわめて自然になされてきたものとして、「行事」というものがあつたのではないかと思う

のである。

そこで、行事についてのべた、戦前、戦後の二つの例をあげてみよう。

戦前のものとしては、東京女子高等師範学校附属幼稚園の実践をまとめた、「系統的保育案の実際」(昭和十年)の中にみられるものである。この解説の中で、倉橋窓三は、そのもっとも核心的部分と思われる「誘導保育案」について、「さて、誘導保育案であるが、別段はつきりした定義があるはずではない。保育項目を保育項目として、個々別々に、しかも突発的に課してゆくのではなく、何かしら一つの主題を以って誘導していくところから、この名称を付した。……(中略)……」

主題は極端にいえば、何んでもいいが、幼児の年齢に適合するを必要とし、季節、行事等に即するを便宜とする。しかし、必ずしも季節、行事等とに関わらず、幼児の現在の興味に合致するものから自在に選ばれていい。選ぶというよりも、幼児達の間からおのずから、まともな選んでくることも多い。」とのべている。

このように、誘導保育案における行事のとりあげ方は、決して積極的ではないが、幼児たちの経験のまとも

りとしての意義を認めている。そして、その中で実際にとりあげられた行事に関する主題としては、年少では、「七夕まつり」「秋祭り」「お月見」「お正月」「節分」「ひなまつり」などがみられ、年長では、「五月節句」「七月祭り」「お月見」「節分」「ひな祭り」などがみられる。

また、戦後のものとして、昭和二十三年に公刊された「保育要領」では、保育内容の例として示された十二項目の最後の項目として、「年中行事」をあげている。これは、公的なものとして行事をとりあげた、最初にして最後(?)のものであろう。その中では、

「幼児の情操を養い、保育に変化と潤いを与え、郷土的な気分を作ってやる上から、年中行事はできるだけ保育にとり入れることが必要である。」とその意義をのべ、それを二つの面からみている。つまり、

「元来、わが国古来から行われている年中行事、ことに祭などは、子供が参加し、楽しむ行事になっている。たとえば、三月のひな祭、五月の端午の節句、七月のたなばたなどは子供を中心としている。これをそのまま保育に取り入れて、ともに楽しみ合う気持を養うことができる。」と、伝承的な行事と、その保育に及ぼす意義

をのべるとともに、

「年中行事には自然物がきわめて巧みに取り入れられている。たとえば、もの節句、しょうぶの節句、月見の秋の七草、クリスマスツリーなど、生活を自然に結びつけさせる味があり、また人間の美しい気持を表現しているもの、または慈悲・博愛・感謝・報恩の人間の美しい精神や社会的生活の楽しさを表わしているものが多い。たとえば母の日、彼岸会、国の記念日、祝祭日等、みなそれである。」と、行事と自然や季節の変化との関係を中心に、幼児の生活と行事の意義についてのべている。さらに、

「園の行事としては、創立記念日、園児や先生の誕生日の会などを開くのもよい。」として、園の行事についてもふれている。

(二)

すこし引用が長くなったが、これらの叙述の中に、行事についての保育における本質は、ほとんどいいつくされているといえよう。

すくなくとも「行事」は、幼児の経験をまとめるということで、また、そこに幼児の生活があるということ、保育内容の中に、きわめて自然に入りこんできたといえる。だから、行事をとりあげることは、幼児の生活をたいせつにしていこうとする保育の伝統的な営みでもあった。

このことは、敗戦後における保育内容の混乱を奇妙なことで救ったものといえる。この時期は、アメリカから、いわゆる経験主義教育が導入され、小学校では、社会的機能を分析し、それを経験のまとまりとしての単元に、どのように構成し、どのように展開していくかというところが大きな問題となった。しかし、幼稚園では、行事を単元としてまとめ、それを季節によって並べることによって、これまでの保育内容とあまり大きな変化なく続けていくということに成功した(?)ということがいえる。もちろん、これについては、行事カリキュラムで内容がないということ、いろいろの批判がなされた。たしかに、いわゆる行事カリキュラムは、行事のために保育をするということにもなりかねないし、現在の保育の中でも多くの問題を残していることは事実であ

る。

しかし、わが国では、季節によって、自然は常に変化している。“つくし”をとりについて春を感じ、木々の若葉をみて初夏を感じるのである。幼児の折ふしの移り変りに対する感じ方はまた格別のものである。

それは、伝承的な行事の中にもくみ入れられてきている。すくなくとも、いろいろな地域に伝わる“祭り”は、このような自然の変化に対応したものであろう。しかも、それは、毎年毎年、自然の変化の中でくり返されてきた。だから、その中で安定感があった。

だが、現在のような自然を失った生活の中で、また、伝承的な地域の行事が減少していく中で、幼児にとって行事は、生活からしだいに遊離したものになっていっているという。

(三)

このようにみえていくと、すくなくとも行事は、現在の幼児にとって、どのような意味をもたせるべきかとい

う、行事についての新しい問題がでてくる。

だが、行事に対する保育者の執着心は、これまでみてきたようにきわめて強い。それは、幼児教育の歴史とともに現在まで残されているからである。このことは、一方では、行事は毎年くり返されるということにより、保育者にとって、もともと安定感のある保育内容となっているということによるうし、他方では、なんとかして、幼児の園での生活に変化を与え、うるおいを持たせようとする善意のあらわれでもあろう。

しかし、このような、行事が幼児の生活から離れつつある時期だからこそ、ここで行事について、いま一度その本質にかえって、考え直してみる必要があると思うのである。

それは、行事の単なる否定ではなく、幼児教育における意義を認めるということの前提の上になつて、保育者の便宜のためではなく、幼児にとって意味のあるものにしていかなければならない、幼児教育の課題であろう。

(十文字学園女子短期大学)

幼稚園の定員を考える

立川多恵子

幼稚園の学級定数について考えるためには、学級そのものについて、十分な理解がなければならぬ。今まで私自身、一人ひとりの園児については異常なほど興味を持ちながら、「学級」については余り関心がなかった。そこで、学級定数について論じる前に、「学級」そのものの意味を考え、その上で改めて、学級定数の問題に触れて行きたい。

一、学級の誕生

数年前、私は郷土の幼児教育の歴史を調べるため、明治から昭和の初期に創設されたいくつかの幼稚園を訪ねたことがある。

私の住んでいる町にも、大正四年に、アメリカ人宣教師アプタン女史の手によって、初めての幼稚園が開園された。当

時を知っている人の話では、某家の別荘を借り受け、その周辺の家庭を訪問し、十二名の幼児（三歳から六歳）を集め、二十坪足らずの家に、砂場だけを作って開園したという。

子どもたちは毎日お弁当を持って登園し、一番大きい部屋に集まっては、保母さんから話を聞き、歌をうたい、庭先に出ては、鬼ごっこ、砂あそびに興じた。

最初十二名だった園児数も、先生方の努力が実を結んで、数年後には、四十名を越えるようになった。そこで女史は、二つのクラスに分けることにした。

開園当時からいた人に、クラスはどんな基準で分けたのかと聞いてみると、「年齢別」ということであった。

この園では、それ以来、三歳、四歳、五歳と、年齢別学級編成が行なわれ、今日に至っている。現在は園児数一五〇名

余、年長二組、年中二組、年少一組の計五クラスとなり、町の中心部に鉄筋コンクリートの園舎を構えている。

町の周辺には、昭和四十年後半から、五十年に亘って、園児数三〇〇〇〜四〇〇〇余名、一〇学級前後の園が次々に創設された。

後から設立された園は、各保育室は廊下で結ばれ、クラスの独立性が尊重される。この傾向は、私の住んでいる町ばかりでなく、他の町にも見られる。

いろいろの年齢の子どもが入り交って遊んでいたかつての小規模な幼稚園は、幼児教育の重要性が強調され、都市化が進むと、入園希望者の数が急増して、大規模園に変容し、入園児は、年齢別にいくつかの「学級」に分散して指導されるようになった。

幼児教育の普及は、幼稚園に「学級制度」を確立させた。設置基準では、一学級四〇名以下とあるが、時には、それ以上の園児が十六坪の保育室につめこまれ、就学のための準備教育のようなものが行なわれている。

二、学級制度に対する再考

他方、保育内容を一人ひとりの幼児の発達からとらえてい

こうとする研究者や、実践家は、現在の幼稚園教育に対する批判や、反省も厳しく、すみやかに幼児教育本来の姿に戻さなければと主張する。

幼児は、十分にあそびこむことによって、幼児期の発達課題を達成することにつながると考え、時間で区切られる保育は敬遠され、子どもが自発的に活動するための十分な時間が確保されるようになってきた。時間に対する配慮は、同時に「空間の広がり」に対する配慮を生んだ。このことは、幼稚園における「学級制度」の再考の一つといえよう。

A 幼稚園は、創立十年を迎えようとしている、定員一三〇名の幼稚園である。創設当時は、小学校入学の前段階として、小学校へ行くための準備教育に力を入れていた。そこで展開される保育は、教師が次の日の活動を考え、教材を準備し、教師のねらいに即して指示を与えて、保育者が中心になつて活動させるといったものだった。

園長自身が大学の幼児教育研究会に熱心に通うことよつて自分の園の保育に疑問を持つようになると、今までなんの不思議もなかった子どもたちの「センス……シテイイ」といふ保育者の指示を求めることばが不自然に聞こえ始め、

幼稚園では、もともとずっと自発的に活動させることが大切ではないかと考えるようになった。

園長の考え方が変わり、先生方がそれに協力した結果、子どもたちは、自分たちの活動に積極的に取り組むようになった。子どもたちは、以前より喜んで幼稚園に来るようになった。そこで園長は、もともと幼稚園生活を子どもたちのものにしてやりたいと考えた。

そのためには、子どもの自由感を十分に保証してやろう。環境を整備して、何時でも、どこでも、子ども自身の興味と関心に基づいた活動が展開できるようにしようと、園長は、先生方に「学級」というわくを取り去ることを提案した。

この園長の提案は、実施するまでに、いろいろな障害があった。もともと大きかったのは、母親たちの反対であった。

「もし幼稚園に学級がなくなったら、子どもたちは、まず自分のやりたいことしかやらないのではないか、それでは活動にかたよりが出てくる。しつても行き届かないだろう」園長は、母親のこうした心配に対して「短期間の中で考えると、たしかに子どもの活動はかたよるように思われるかもしれない。しかし長い目でみたら問題は無い」とか「外側からみて同じように見える活動でも、そこで育つ子どもの内

面はちがっている」等力説した。園長の主張に同調する先生方の熱意も重なって、父母側は、とにかく園に任せようということになった。

新年度を迎えて、園長と六人の先生方は、大はりきりで子どもを迎えた。年長になった子どもたちは、自分の保育室が一定してないのでとまどった。不安な日がつづいたが、やがて子どもは仲間を求めて、さまざまな場所で自分たちのあそびを展開するようになった。新入園児が、自らの力で遊び出すには、多少時間がかかった。

園長も、先生方も、やがて以前より、もともとずっと、ダイナミックな活動が展開されるにちがいないことを期待した。

しかし、その結果、二つの困った出来事に遭遇した。その一つは、保育者が情緒不安になったことである。かつてA園では、一人の先生が、三〇人前後の子どもの担当していた。それぞれの先生は、学級担任として、この子たちについて見守ってやればよかった。

学級がなくなると、登園した子どもは、かばんにおいて、シールをはると、幼稚園中に散る。保育者は、不特定多数の子どもとかかわらなければならない。子どもの気持を察してやることが出来にくい。

そこで先生方は、放課後頻繁に、ミーティングの機会を持たなければならぬと考えたが、それは時間的にも労力的にも容易なことではなかった。

もう一つの困難点は、環境設定の問題であり、環境整備を十分におきたいと、積木コーナー、絵本コーナー等、子どもの活動を予想して、さまざまなコーナーを作ったが、それでも、子どもの活動に対応しきれなくなった。積木も、絵本も、ブロックも幼稚園中に散らかった。子どもは、コーナーに用意されていた遊具を予期しない場所で、予期しない方法で使った。園中に散った遊具をどう整理してよいか悩んだ。

三、学級の復活

先生方は考えこんでしまった。話し合いをつづけた末、もう一度「担任制度」を復活することにした。これを「学級」の復活といっていいかどうかは、「学級」をどう考えるかによって異なるかもしれない。

とにかく、一人の先生と、子どもたちのために、特定の部屋が再び用意された。子どもたちは、その部屋にかばんや、帽子をおき、シールをはると、どこへいってもよいことにな

っていたが、大部分の子どもは、自分の部屋の周辺であそぶことが多かった。

元気な年中児が、年長児の部屋に行くこともあるが、けんかになると、自分の部屋に戻って来る。担任の先生は、それを笑顔で迎える。一度「学級」のワクをはずしたA園も、こうしたプロセスを経て、再び「学級」をよみがえらせた。

「学級」によって固定的になっている空間を広げようとした園長の思いが、先生方を動かしたにもかかわらず、結果的には、保育者がついていけなくなった。

園児数百名を越える園では、「学級」のわくをはずすことは難しい。したがって、幼稚園にとって「学級という制度」は、小学校の模倣的要素も強いが、園長や、保育者の妥協の産物かもしれない。

「学級」も、担任の運営の仕方によっては、たしかに子どもの自発活動を阻害する要因になる。しかし、「学級」を集団生活のホームベース（母港）と考えた場合異なった興味をもつ。担任と子どもが、信頼関係で結ばれ、子どもが不安に感じた時には、何時でも戻ってきて、ホットする場所として学級が存在するなら、「学級」もまた子どもにとって、大事な場所である。

四、保育者側から学級定数を考える

今回は、学級を子どもたちのホームベースと考え、その守り手としての保育者が担当する子ども数を検討することによって、「学級定数」という与えられた課題に答えたいと思う。

私は教え子に「あなたの担当する子ども何人位が理想ですか」と尋ねてみた。

ある人は即座に、「三十五人位かしら、私のクラスは、今、四十三人でしょう、もう少し減ってくれと、行き届くのですけど」また、ある人は「私のクラスは三十三人、二十七、八名に減ってくれと、一人ひとりの子どもが、今日どんな状態だったかわかるのですけど」また、ある人は「私のクラスは、今、二十七人、二十人位になると助かります。この前おたふく風邪で、欠席が多かった週は、一人ひとりの子どもの状態がとってもよくわかりました」という。

教え子たちのいうことをきいていると、皆、現在の担当児数に満足せず、より少数を望んでいる。一人ひとりと十分つながりを持ちたいとする保育者の願いとしては、当然のことと思える。

一人の保育者の担当可能な園児数は、経験年数で決まるの

か、それとも個人差なのだろうか。

経験一年目の保育者「私は現在、三十四人の子どもを担当しています。最初は二十人位がやっとだと思っていました。

しかし二学期の終り頃から、子どもがグループであそぶようになり、いくつかのかたまりとして、とらえることができるようになると、どうやら全員が見えるようになりました」と。

経験三年目の保育者「私は、子どもがグループであそんでいても、一人ひとりとしてとらえます。例えば、同じように基地ごっこをしていても、それぞれの子どもの思いは、ちがっていると思うのです。私は三十五人を担当していますが、多いと思います」と話した。

経験七年目の保育者「私は三十七人を担当しています。多いといえば、多いような気もしますが、私の場合、多いなら多いで、それなりのやり方をします。……」と話してくれた。私は瞬間さすがベテランだと思ったが、話し合っているうちに、保育の在り方の問題であることに気づいた。学級を一つのかたまりと考え、同じ行動をさせようとする場合、はみ出す子どもについて注意していればよいのであり、一人ひとりのつながりについては気にならないかもしれない。

それに対して、保育者として、一人ひとりと出会い、子ど

ものの内面を理解しながらきめこまかな指導をするには、担当園児数は少ないにこしたことはない。

五、子ども側から学級定数を考える

「学級」は子どもにとって、ホームベースであるとするとき、大人との程度の接触が必要かによって異なってくる。幼い子どもは、何時も大人を慕い、大人との接触を求めるが、成長するにしたがって、幼稚園のどこかに信頼する大人がいることで満足する。そこで不安を感じた時だけ助けを求める。したがって、子どもの年齢によっても、個人差によっても、大人に対する接触度は異なってくる。

また、学級を子どもの主な活動の場と考えた時は、年齢による、グループの大きさと、グループの数などによって、学級定数を推定することも可能かもしれない。

まとめ

幼稚園は、子どもが自発的に活動を展開し、いろいろな遊具や材料に出会い、それと主体的にとり組む中で、イメージを広げたり、子どもなりに思考し、友だちと遊んだり、ぶつかり合う中で、人間関係を学習する場であるとするとき、環境設定として、もっとも大切なのは、自由な時間と、空間とで

ある。その中で、はじめて子どもたちは、自分の可能性の限界にいどむこともできる。

しかし、それだけでは十分ではない。子どもの活動源として情緒安定のためにホームベースに対する配慮も必要である。幼児教育の場で「学級」に、意味を求めるとしたら、子どもが安定して、意欲的に活動できるためのホームベースとしての役割である。学級が、ホームベースとしての機能をもつための必須条件の第一は、担任と子どもが相互に信頼し合っていることである。

こうした見地から、学級定数を考えてみると、現行の基準では、担当児数が多くなり、一対一のふれ合いも十分望めず、良心的な保育者を悩ます。ホームベースとしての意味をもつ「学級」も、学級担任の保育に対する考え方によっては、子どもたちの自由を奪う「わく」的存在となって、子どもの活動を阻害する。担当児数が多いからといって端的に画一的指導をすると、子どもとの一対一の関係が妨げられるばかりでなく、自主性も育たない。園が子どもの自発活動の場を保証するために、思いきって学級のわくを開こうとすることがある。そのためには、園自体の規模についても研究する必要がある。

(十文字学園女子短期大学)

京阪神聯合保育会雑誌(2)

——時代的な内容の変遷——

水野浩志

前回にひきつづいて京阪神聯合保育会雑誌の内容の変遷について、これを明治三十年代前半と後半、明治四十年代と大正期の四期に分けて各期における主なる理論的傾向や保育会の動きを同雑誌からたどってみることにしよう。

① 明治三十年代前半の動向

同雑誌が創刊された明治三十一年七月から第九号(明治三十六年一月)に至る三十年代前半の傾向は、幼稚園保育における恩物

使用法や、新しい唱歌・遊戯の紹介及び京阪神各地区における幼稚園および保育会の創立沿革事情の紹介記事が非常に多かった。恩物の使用法やその意義については神戸の頌栄幼稚園長、エー・エル・ハウや同園の主任保姆和久山キノ等が中心となり、三市の保育会を指導していた。三市保育会結成の動機になったのもハウの講演をきくために京阪地区の幼稚園関係者が一堂に会したのがそもそものきっかけであった。わが国におけるフレイベル精神の普及者であり実践者であったハウとその忠実な弟子、和久山キノは、三市聯合保育会結成後、その中心的な指導勢力として活

躍したのであった。しかしながらハウを中心とする神戸保母会が明治三十五年、宗教上の理由で三市聯合保育会を脱会してからはその指導勢力から脱落してしまった。神戸保母会脱会の経過報告は同雑誌第八号（明治三十五年七月）に詳述してある。

ハウはアメリカのフレイベル主義保育の指導者スザン・ブローとも親交があり、アメリカに本部を置く万国幼稚園協会に会員として所属していたので、京阪神保育会雑誌に万国幼稚園連合大会の報告記事（第三号）や、スザン・ブローの講演要旨（第四号）、欧米各国の幼稚園発達事情（第四号）およびその種類（第六号）、あるいはアメリカにおける幼稚園論争（第七号）等を寄稿し、会員の啓蒙につとめてきたが、第八号以降にはほとんどみずから寄稿することはなかった。このことはわが国の幼稚園教育発展にとってまことに惜しいことであった。

創刊号および第三号（明治三十二年九月）に掲載されている東京女子高等師範学校教授兼同校附属幼稚園主事、中村五六の論説は、第二回および第四回三市聯合保育会での講演内容であるが、ここでは形式主義的な恩物使用法の遵守にのみ力を入れていた当時の幼稚園保育に批判を加え、生理学や心理学の研究成果に基づく児童発達の特徴を把握した上での学問的な保育方法の確立の必要性を強調している。そして「恩物の児童発達に及ぼす意義とそ

の扱い方の技術を充分把握・習得した者でない限りはみだりに恩物を使用してはならない。」「もし使うならば保母各自の力量に応じ恩物中適宜なものを取捨選択し、子どもを楽しくかつ自己活動的に遊ばすよう心掛けることが必要である」こと等を強調している。これはわが国における恩物主義保育を批判した最初の論説として興味深い。また第七号（明治三十四年十二月）には、「我国における幼稚園は果してフレイベル流のものか」という彼の論説が掲載されているが、ここでもフレイベルの精神を忘れて形式のみあるいは技術のみにとらわれて実質をとらえていないわが国幼稚園保育のあり方に警鐘を鳴らしている。

第八号と第九号には東京女子高等師範学校助教授東基吉の「幼稚園学説及現今の保育法」という論説が掲載されている。これは彼が『教育学術界』誌に発表した処女論文の再録であり、明治三十七年に刊行した『幼稚園保育法』の骨子を述べたものであった。彼は中村五六よりも明確な調子でフレイベルの恩物論を批判し、その中にふくまれている「牽強付会ともいふべき幽玄な哲理」や「表号的教育論」（象徴主義）はいささかも認めることはできないとし、恩物の理論や使用順序の形式を破棄し、もっと自由に子どもの自己活動を満足させるための道具として使用すべきことを提唱している。また遊戯や唱歌や童話なども従来の形式的

保育から脱して、子どもにふさわしい自由な、自然主義的保育の採用を強調している。

このような東基吉の革新的保育論が京阪神聯合保育会雑誌にはじめて紹介されて以来、同地区の保育界の動きは次第に変化してくるが、それは三十年代後半に入ってからのことであった。

② 明治三十年代後半の動向

同雑誌第九号から第十八号（明治四十年一月）までの論説や記事から同保育会の動向を伺えば次のようにいえよう。すなわち明治三十年代前半は、従来の幼稚園教育に相当の自信と誇りを以てフレーベルの恩物中心主義的保育を実践してきた人々が、三十年代後半に入ると東基吉等の批判論を通して、次第に恩物中心の保育に懐疑の眼を向けはじめたこと、さらには幼稚園に対する世人の非難・批判に対する幼稚園教育の意義や保育効果確認の必要性が痛感され、新しい幼児教育法に対する暗中摸索の時代であったこと。

フレーベルの恩物論や当時の幼稚園教育に対する批判は、東基吉の論説のみならず、京都市保育会で活躍していた市橋虎之助の著書『幼稚園の欠点』（明治三十五年）がフレーベルの恩物論に

徹底的な批判と、従来の幼稚園に対する過激なまでの攻撃を加え、当時の三市聯合保育会の人々に一大波紋を投げかけたことも事実である。金科玉条とされてきたフレーベルの恩物主義保育がこれで一挙に崩れ去ったわけではなく、従来の恩物論を信奉する人々と革新的保育を導入しようとする人々とが入り乱れて、現場の保育は相当混乱をきたしたものと思われる。

明治三十六年五月、大阪府教育会主催で開かれた全国教育大会保育部会の報告内容は、第十一号及び第十二号に詳細に掲載されているが、そこでは神戸保母会提出の研究協議題目について、エー・エル・ハウおよび和久山キノ等が活発な論戦を展開してフレーベルの恩物論などを擁護している。また岡山県保育会でも明治三十六年、夏期講習会にハウおよび和久山キノを招いて保育法の講義を実施し、「保育法講義録」として出版している。このようにハウや和久山等が三市聯合保育会からは脱落しても、全国的な保育大会や関西地区になお相当な指導勢力を以て活躍していたことを知ることができる。ハウの教えを受けた人々はハウ式保育（フレーベル主義）を信奉し、容易にフレーベルの恩物使用における順序や理論を破棄することはしなかった。このように根強いフレーベルの恩物中心主義保育と自然主義的自由主義的な進歩的保育とは相対立しつつ、徐々に後者の勢力が強くなっていったと

いうことができよう。

しかし明治三十年代後半は幼稚園に対する世間の風当りが強く、幼稚園は全く不振状態にあった。三市聯合保育会では、幼稚園教育の意義とその必要性を世人に理解させるためには、その教育効果を立証することが必要であるとし、幼稚園の保育効果を調査するための検討委員会が組織された。それは全国教育者大会保育部会の席上、大阪市保育会に委託されたものであったが、一年間の検討結果が同雑誌第十二号（明治三十七年七月）に掲載されている。「幼稚園に於て保育を終りし幼児が小学校其他将来に於ける成績調査に關する方法」と題して調査すべき内容項目・方法等の原案が示されている。

このような保育効果に關する調査方法が発表されて以来、三市各保育会は積極的な調査に取組んだようであるが、その結果が発表されるのはいずれも四十年代以降のことである。また明治三十年代後半には日露戦争が勃発し、同誌第十二号に「宣戦ノ詔勅」が巻頭に掲載されたのをはじめ「時局ニ関スル詔勅」(第十三号)、「聯合艦隊司令長官ニ賜ワリタル詔勅」(第十四号)等、第十六号(明治三十八年十二月)まで毎号詔勅が掲載されている。第十三号(明治三十七年十二月)には神戸市出征軍人遺族児童保管所をはじめ、大阪市九条幼児保育所など保育所開設の記事が多く見ら

れる。このように日露戦争が保育界にいろいろ影響を与えたと思われるが、当時の三市聯合保育会第十二回大会(明治三十八年)の協議題目「幼児に時局に關する觀念を与うるの可否」についての協議内容をみると、各市保育会とも敵が心をそそる等のことのないよう保育に気をくばり、幼児に時局認識を与えるなど全く必要なしとの結論を出している。保育の世界に軍国主義的色彩の入りこむことを拒否した当時の三市保育会の人々の見識を伺い知る意味で興味深い(第十四号)。

③ 明治四十年代の動向

同雑誌第十九号(明治四十年七月)には京都帝国大学教授谷本富の論説「幼稚園を如何にすべきや」が巻頭にかかげられている。これは第十四回三市聯合保育会(明治四十年六月)における講演内容であったが、ここには当時の幼稚園に対する非難の声が七か条にまとめられ、今後の幼稚園に望む事項十二か条がかかげられている。この中で谷本は健全な中流階級の家庭には幼稚園は不要で、上流階級や下層階級の家庭にこそ幼稚園は必要だと強調している。当時の教育界の第一人者であった谷本富のこのような中流家庭の幼稚園不要論は保育界に大きなショックを与えたもの

と思われる。

同雑誌第二十四号（明治四十二年十二月）には東京女子高等師範学校助教和田実の「幼稚園出身児の成績に関する調査について」の論説が掲載されているが、和田はこの中で長期にわたった幼稚園出身児の成績調査結果に基づいて、幼稚園が一般家庭の幼児にとって如何に必要であり、大切なものであるかを強調している。

このような幼稚園教育の必要性を立証するための保育効果に関する調査は、三市聯合保育会でも明治三十七年以降着々と進められてきたが、その結果は同雑誌第二十五号に掲載されている。そのほか第二十一号（明治四十一年七月）には長崎市の小学校長が幼稚園出身者と家庭から小学校に入学した児童との成績比較を発表しており、第二十四号には京都市および神戸市の各小学校長による調査結果、明石女子師範附属小学校における調査など、保育効果を立証する報告が数多く掲載されている。

とりわけ第二十七号（明治四十四年七月）の付録につけられた大阪市役所学務課の調査による「保育の有無による児童成績比較表」は、大阪市の小学校および高等小学校在籍児童二四、〇〇〇人を対象に各学年、全教科にわたりその成績を比較したもので、三年がかりの当時としては画期的な大調査の結果報告であった。

そして結論的に幼稚園の保育を受けた児童の方が、全く保育の経験をもたなかった児童より、はるかに小学校や高等小学校で成績が優れていることを強調している。

このように明治四十年代は幼稚園不要論や有害論等、幼稚園教育に対する世人の非難や批判に反ばつた当時の保育関係者達が、幼稚園教育の重要性や必要性を立証しようとして、保育効果の調査に一致協力してあたつた時代であり、またその結果、幼稚園教育に対する新しい自信をとりもどつた時代といふことができるであろう。

明治四十年代には和田実の革新的な保育理論の一端が、はじめ同誌第二十六号（明治四十四年一月）に紹介されているが、そのほかにはほとんど同誌に彼の論説は掲載されていない。第二十六号には「保育の事について」「現今の保育について」「阪神地方の保育界を見る」という彼の三論説が紹介されており、京阪地区の保育界の積極的・進歩的な姿に拍手を送っている。このような和田実の阪神地方の保育界視察報告は、三市聯合保育会を鼓舞したものであったが、さらに同聯合保育会を勇気づけ、実践の理論的裏付けを提供したものは、倉橋惣三の論説「幼児保育の新しい標」（同誌第二十九号）であった。これは明治四十五年六月に開催された第十九回三市聯合保育会における講演内容であるが、彼

はこの中で、現代もっとも要求されることは、神経衰弱的な人間にならないよう、活動力にみちあふれた人間をつくることであり、そのためには幼児における神経系統を保護し、育成することがこれからの幼児保育の新目標とならねばならないと強調した。従来の幼稚園における室内中心の保育は幼児の神経系統に有害であり、もっと自然を相手とした戸外保育が必要である。指先の練習より大筋肉を使用する運動をもっと活発にさせることが筋肉発達 の順序からいっても必要である。既成の高価な恩物教材を扱うことよりも、もっと自然の与える恩物を扱うことの必要性などを論述している。

これまでも三市保育会では自然物の利用や園外保育など多くの進歩的な試みが実践、報告されてきたが、この倉橋惣三の講演は、彼等に理論的根拠を与えることとなり、三市各保育会は自信を以て恩物中心主義をすて、戸外保育や自然物利用の保育を積極的に実践しはじめたのである。

④ 大正期の動向

明治末年における倉橋惣三の新保育の奨励は、大正期の自由主義・児童中心主義の教育思潮に裏付けられながら幼稚園教育界に

滲透していった。そしてまた子どもの実態を把握することの必要性も強調され、実験的科学的な保育研究の運動が展開されはじめるとともに、フレイベル主義保育にかわってモンテッソリー主義保育が新時代の脚光を浴びて登場してきた。しかしまた一方では真のフレイベル精神の研究とその実践における反省も行なわれ、フレイベル保育の再認識の必要性も強調された。

このような大正期保育思想の変遷も京阪神聯合保育会雑誌は如実に描写している。

モンテッソリー主義保育について同誌にとりあげられた最初の論説は大正二年二月の第三十号に掲載された神戸幼稚園保母佐藤ますの「モンテッソリー氏教育的器具に就て」であった。神戸市保育会は神戸女学院の横川四十八を講師として「モンテッソリー科学的教育学」の講演会を大正二年二月より週二回ずつ計八回の連続講演を囀催している(同誌第三十一号)。また第三十二号(大正三年二月)には大阪市西区保育会主催による講習会の京都帝国大学助教野上俊夫の「モンテッソリー氏教育法」が紹介されている。第三十三号には京都市保育会が大正三年七月に開催した、日本女子大学附属豊明小学校主事、河野清丸を講師とする「モンテッソリー氏講演会」の内容記事が掲載されている。神戸幼稚園長望月クニはモンテッソリーの感覚訓練法をまねて「触覚筋覚関

節寛を根底とせる「図画教授の実験的研究」を第三十二号に発表掲載している。また同号には大阪毎日新聞に掲載された「モンテッソリー女史新教育」の内容記事が紹介され、第三十五号には膳たけの「関西保育界とモンテッソリー女子教育思想」、第三十六号には河野清丸の「モンテッソリー教育法の功罪」などが掲載されている。

大正二年神戸幼稚園の望月クニは子どもの実態を知るために京都帝国大学の榎崎浅太郎を同園に招いて一年間、毎月二回の心理学研究会を開催しているが、これを基礎として彼女は同園の保母達と協力しながら子どもの実態調査や実証的科学的な保育法研究を行ない、三市聯合保育会雑誌につきつきにその成果を発表掲載していった（三十二号・三十三号・三十七号・四十号・四十二号・四十三号・四十四号の各誌）。望月クニを中心とする科学的保育研究のあり方はやがて京都・大阪にも普及し、三市保育会の運動として展開されていった。

一方フレーベルの保育理論については、その神秘主義や象徴主義哲学を抜きにした現代心理学の立場に立つてのフレーベル教育法のすばらしさが再認識され、フレーベル精神に立ち返れという主張も出はじめていた。

大正四年の第一回全国幼稚園関係者大会において望月クニはモ

ンテッソリー教育法を批判し、フレーベルの自発活動の理論をこえる何物もなく、単なる方法技術論で多少参考になる程度のものであるといった趣旨の講演を行っている。東京府女子師範学校附属小学校主事、日田権一もモンテッソリーの教具よりフレーベルの恩物の方が永続性があると強調している。（『日本幼児保育史』第三卷一六七―一七三頁参照）

これらのことから考えると京阪神地区では望月クニ等を中心にモンテッソリー教育法がいち早く現場保育に導入され、研究実践されたのであるが、結局はあまり永続させず、一時の流行現象に終わってしまったというのが実態だったと思われる。

そして倉橋惣三が提唱した大自然を教場とした戸外保育、自然物利用の保育が三市保育会では大いに歓迎され、実践された。同誌第四十五号（大正十一年）には大阪市で開設実践された露天幼稚園の記事がのっているが、さらに大阪毎日新聞社会事業部の橋詰良一は大阪に「家なき幼稚園」の運動を積極的に展開していったのである。

このほか大正期には幼稚園関係諸団体の運動も次第に活発化し、とりわけ三市連合保育会は当局に対し積極的に多くの陳情・建議を行ない、大正末年には幼稚園令制定に向け全国的な運動を展開し、やがて幼稚園令の制定に至るわけであるが、その原動力

となつて活躍したのは望月クニであり、彼女は大正期の京阪神聯合保育会の中心的指導者として活躍したといふことができるであらう。三市聯合保育会で行なつた陳情や建議、さらには研究協議題目の主要なもの等については『日本幼児保育史』（日本保育学会編）第三巻の「大正期の保育会の姿」の拙稿中に掲載してあるのでここでは省略する。

以上京阪神聯合保育会雑誌の創刊号から関西聯合保育会雑誌と改称（昭和三年）されるまでの約五十冊の内容変遷について、理論的・実践的な動向の移り変りを概観してみた。同誌にどのような理論や実践が掲載されているか、大まかな視野を得る参考となれば幸甚である。しかし前述したように三市聯合保育会雑誌はまことに貴重な保育史的文献であり、早い機会に全巻復刻され、完全な解説が試みられることを期待し、拙稿をこれで閉じることとする。

＝了＝

（東京都立立川短期大学）

第10回みどり会夏季研修会おしらせ

今夏のみどり会研修会は、みな様のご協力のお蔭で第10回を迎え、これを記念し、東京で開催いたします。真の保育の道を進み、21世紀をになう幼児を育てるために次回への前進の基となるよう、みなさまと研修いたしたいと思います。今までご参会のみなさまは勿論、他の方もお誘いあわせて多数ご参加をおまち申しあげております。

主題 真の保育の道を進もう

— 21世紀をになう幼児を育てるために —

期日 昭和55年8月20日、21日、22日の3日間

場所 東京都文京区大塚二丁目一 お茶の水女子大学講堂

会費 一名六千円（申込と同時に振替で払込むこと）

内容 ・講演——河野重男氏 勝部真長氏 津守真氏

・シンポジウム——服部公一氏（作曲家）、やなせた

かし氏（漫画家）、竹田扇之助氏（人形座主幹

・レセプション（ご希望の方は会費八千円別）

（今までの講師全員ご出席の予定）

・話しあい（課外）

申込期間 6月15日の消印より受付けます。

申込方法 氏名、現住所、勤務園名、勤務園住所、夏季連

絡先TELを記入し、一名一枚にかき、会費六

千円は（東京99085）へ払込んで下さい。

尚、詳細は第1回〜第9回までご出席の幼稚園保育園にはプリントでき次第郵送いたします。その他詳細御希望の方は50円切手同封の上お申出下さい。

食 べ る

長山篤子



しそ、こごみ、ゆきのした、たんぼぼ、のびる、しこ、等がわが家の庭には、放っておくと生えてくる。これらは、前の住人が、食べるために集めたものであるらしい。私もここ埼玉に住む前は、青森の弘前において、こごみの和え物は大変美味しいと思つて食べていた。

露のとうが雪の溶けた後の枯草の中から出てくると、春を舌で味わつてみたいと、必ず食卓に出してみたものである。普通、苦味を好まない子どもたちも、不思議と美味しさと喜ぶ。たんぼぼの花は、野草料理を食べさせる所で佃煮にしたものを美味しと思つた。

五感のうちでも味覚は、一番強い印象を人に与えるものであるのだが、食べ物の好き嫌いは、なかなか克服しがたいことを考えると、成程と思う。美味しいと云う経験は、私を豊かにしてくれているので、幸

なことに私は味覚で嫌な印象を受けることなしに育つたのではないかと思う。

味覚は大変微妙で経験に忠実である。私の住んでいる処は、狭山茶の産地である。土地の人は、狭山茶が一番美味しいと言ふ。そんなことを言ふと他所の産地の方に怒られるだろうが、要するに土地の味があるのである。近くにさつまいもの産地もあり、これも又この土地のさつまいもが一番美味しいと云う。近くの魚屋に買物に行くと、その年とつた主人が、この魚はどのでないか、のりは、どこのでないかと、講釈を言う。成程と思つて買って食べるとそんな味がする。そして、ここいらがスーパーとは違ふなと思つたりする。私は、十五、六年前、松江のそばを目の前で打つて貰い、きんぴらごぼうと一緒に食した事があるが、この時の味は、今もつて忘れられない。

最近のわが家の食卓を振り返ってみると、繰り返し出してくるものは、冷凍のぎ

ようざであり、冷凍のハンバーグであり、冷凍のフライである。お陰で子どもたちは、Y会社のコロッケよりもA食品のコロッケの方が美味しいと言う味覚を持つしまつである。子どもだけでなく、私までがその感覚に慣らされつつあり、ハッとさせられる。美味しいコロッケはどうやってつくるか、美味しいじゃがいもはどのように選んだらよいかということ子どもに伝えるのは親のつとめではないかと、全く出来ない自分反省している。

冬になると、私はよく、パイを焼く、リンゴは弘前の紅玉を使うことにしているが、弘前の紅玉で作ったアップルパイを味わっていると、そこにいる子どもも大人も大変豊かな気持になり凡てが和やかになる。弘前と云う土地と母親と云う人が重なって、

「美味しい」と云う実感が生まれてくるようである。

食べることは、人間の最も基本的な行為の一つであって、わたしは、基本的なことを最も大切にしてゆきたいと考えている種類の人間なので、食べることに熱心である。熱心であることの一つの証に、私はよく食べ歩く。店の前に立って、その雰囲気どうかを感じとる。熱心であるところには、様々な工夫があつて面白い。それも人真似的な工夫でない、独特なものがある。そんなお店で食すると、「食べる」といった経験をしたな、としみじみ思うのである。小さなお店であるが、ご主人と奥さんが、とても気持よく迎えてくれるお店がある。そこで出される里いもとイカの煮つけの一品は、何ともいえない味がある。ある時そこご主人が、「宮崎で、おふくろが

採った竹の子を罐詰にしました。持って行って下さい」と下さった事がある。何とも、その竹の子がいとおしくて、おみをつけにしようと思った。熱心であると云うことは、心を込めることが出来るので好きである。

手まえみそと言うことばがある。田舎に行くとき自分の家で造った味噌の自慢をす。そこには、競争と言う意識があるのではない。誠に和やかな自慢である。

「まあまあ、わたしの家の味噌を召し上って下さい」と自分たちが馴染んだ味を自慢するのである。自分のうちの食に馴染み、それがたまらなくいいといった人の心は、なんと穏やかで素晴らしいのだろう。

「食する」それは私の人生を豊かに支えるものであり、誠に心良いものである。

(秋草学園短期大学)

遊びの中の

「食べる」こと

入江礼子



「食べる」ことは、生きていく上で必要
欠くべからざる条件であることは言うまで
もないことですが、子ども達の遊びの中
もこのことを含んでいるものは、丁寧に受
け止める必要があると考えています。

私が初めてこの事の重要性に気付かされ
たのは、幼稚園の年長組の担任をしている
時のことでした。その日、外は肌寒い雨が
そぼ降っていました。組ぐみの中には子ども達の
持つていき場のないモヤモヤしたエネルギー
Iが充満し、私自身も彼らのそんな雰囲気
に吞まれ、部屋の片隅に小さなコーナーを
作り、そこに陣取ることで、かろうじて気
持ちを支えていました。そこへK君がやっ
てきて粘土遊びをはじめました。「先生、
何が好き?」(K)「カニコロッケ」(私)
すると彼は俵型のカニコロッケを作り、「ハ
イッ」と差し出してくれました。「そうだ。
ウドンも作るよ。食べてね。」(K)「いいわ

よ。」(私) と言う彼は、井から箸、卵、
蒲鉾など色々作り「食べてっ!!」(K)と
持つてきました。「いただきます。モグモ
グ…。あーおいしかった。あつ、おつゆも
飲まなきゃ。ゴクゴク…」(私)「あのね、
それおつゆじゃないよ。ジュースにお砂糖
が入ってるんだよ」(K)「エッ、ベッベ
ッ、大変」(私)「アハハへへへ(いたずら
っぽく笑う)」(K)

子ども達が大人にかかわりを求めて来る
時、言葉で直接的に「私はあなたにかかわ
りを求めています」とは言いません。この
例のように食べるものを作りそれを手渡す
という行為の中にすべての意味が含まれて
いるのです。K君が一生懸命作ってくれた
ものを私が食べることで彼とのかかわりが
成立したのです。ところがK君はこの遊び
の終わりで、私がおつゆと思つて飲んだも
のをおつゆじゃないと言つて私が食べるこ

とを拒否しました。「食べる」ことには、また「呑み込む」という過程が含まれているのです。K君も一旦は私と遊びの関係が成立したことを喜んで色々と作ってくれましたが、それを次から次へと食べていく私に一種の「呑み込まれる恐ろしさ」を感じていたのではないのでしょうか。当時、十月であり、入園当初は少々線の細い感じでしたがK君も、かなりしつかりとした「自我」が芽生えはじめ、それが、私に呑み込まれ放しになることを拒否したように思うのです。「食べる」ことを中核とした遊びの中にはそこまでの意味が含まれていると考えてよいのではないのでしょうか。

その後数年経ち、二児の母となった私は、やはり現実の「食べる」ことと、遊びの中の「食べる」ことに否応なく毎日触れて過ごしています。二歳一か月の娘Aは、最近は一人遊びの時間も増し、私が炊事や

洗濯をしている間は、お気に入りのぬいぐるみをオンブしたり、絵本をみたり、ベッドにねかされている弟に手を出したりして過ごしていますが、ふと、私の所へ戻ってきて、「はい。ごはんですよ。食べてくださいーい。」これハンバーグよ」などと言って手を差し出し、私が家事の手を休めて「まあおいしそう。いただきます。」と言って食べるとニコニコし、「もつと？」と聞きます。もつとと答えた時など走って作りに帰り、ササッと作ってまた持ってきてます。何度かこうして遊ぶと、又自分の遊びへと戻っていきます。いつだったか忙しくて「ちよつと待っててね」と言ってしまうとすぐに彼女の差し出したものを食べないでいると、急にグズグズ言っ私の傍にまわりつき、一人遊びを楽しむ余裕を失ってしまいました。母に拒否され、Aは生々し

さて四か月の息子T。彼は毎日ミルクを飲んでます。世の母の常で私も彼がいっぱい飲んでくれるとホッと一安心します。これは年齢が小さいほど飲むこと自体が直接生存にかかわるとも言えるのですが、むしろ私の与えたものを受け入れて飲んでくれるという事で安心して思うようになります。離乳期になるとよく離乳食を食べないといつてそれはそれは心配なさるお母さんがいます。これも先程同様、「自分が手かけたものを食べてくれない」ことで無意識のうちに自分が子どもに拒否されたと感じ、それが不安の種になるのだと思います。

要するに遊びの中の食べることも実際に食べることも「人と人とかかわり」がその奥に深まれているので、大切に考えなければならぬと思うのです。

母と娘

野田 幸江



一人娘を、わが母校にと願う母親の夢がかなえられたのは、小学校入試失敗のあと六年間の母と娘のそのみを願つての闘いの末であった。「それ程、苦しいものではありませんでした。本人も結構成績のあがるのを楽しんでた様ですし」という母親の言葉にもまんざらのうそは感じられなかつたし。

礼儀正しい母親の物腰には、いかにもしつげの行きとどいた娘時代を彷彿とさせるものがあつた。事実、母親が完全とも思える自分の母に對しだいた、あこがれにも似た尊敬の念は、三児の母親となつた今も

なお変ることなく続き、何か迷う事があれば誰よりもまず母に相談し、その解決策はいつも満足すべき効を奏したという。

そんな母にすめられるままに嫁ぎはしたものの、そこで出会つた夫は、事々に母親の常識を超えた考えの持ち主であり、この父親にまかせておくことは出来ないといふあせり、不安、いらだちが母親の気持を一層勢いこませ、娘に對する支配となり、「人には迷惑をかけぬ様」「自分の事よりも相手のことを考えて」という子どもにとつては、苛酷すぎるとも思える要求となつて現われたようである。

そんな母親の教えを素直にとり入れ、むしろ自分の作品として誇りさえ持つていた娘が、「もつとスマートになりたいから」と野菜ばかり食べる様になつたのは、中学一年の二期期の始め頃であつた。そして「私にもそんな事があつた」と娘らしさの現われとむしろほほえましく思いながらも、「作つてくれる人に悪いと思わないの」と注意する母親であつたという。しかし、いつもの素直さはどこへやら頑強に節食、すっかり細くなつてしまつた体をなお且つ痛めつけるかの様に過激な運動をし、夜遅くまで勉強しているわが娘の姿に不安をいだき、相談室を訪れたのは、もう二期期も終ろうとしていた時であつた。スマートさ等通りこしてしまつた瘦身に驚きながらも、平静を装つて学校の事、友達の時等を話しかけても口は真一文字に堅く結ばれたまま、そこには食べる事も、話す事も、その働きの

一切を拒絶した口があるだけであった。

「食べる」それは自分にとって必要なものをとり入れる事であり、「話す」それは自分にとって必要なものをき出す事ではないか。もしそうであるならなぜ、その働きを放棄してしまおうとしているのか。もしかして働きのやめてしまっているのは口だけでないのではないか。そんな疑問をなげかけている口がそこにあった。

幼ない時からの母親の一方的なしつけは、自分というものがまだはっきりしていない時代には、それに従うことに何の疑問も、脅威も感ずる事はなかったどころか、むしろ良い子としての評価は自分自身を満足させるものであっただろう。しかし、そんな満足が続かなかつたところに、今回の問題が起り、それは彼女の人間としての成長を示すものとも考えられた。

受験という一つの目的を果たした時、彼

女の思春期は一気にその本来の活動を開始したようである。「母のいいなりになって

いた自分とは何であったのか」そんな疑問に答えられない自分。母の人形でしかなかったのではないかという焦燥、その壁は、今まで自分で考え、自分で行動してみる事の少なかつた彼女にとっては、あまりにも大きく、厚いものであった様である。人形にはなりたくない、ざりとて解決の道は探す必要も、乗り越す必要もない。

今までの人形の生活へのたちがたい執着、そんな心の葛藤とは裏腹に体だけは着実に大人になって行く。それはますます彼女を混乱させるものであったのだろう。そしてそれをのり切る事が大人になるという事であるのなら大人になる事をやめてしまおうと考えたのではないか。

大人になる事をやめる、それは成長を意味する「食べる事」の拒否となって、その

事を訴えているのではないか。それは、更に、支配的であり、分身でもあった母親に対する自分自身を傷めつける事の反抗でもあったのだろう。

三か月余の入院の後、彼女は突然に食べ始めた。「どうして今まであんなに食べられなかつたのか！、バカみたい」という言葉を残して退院して行った。

そして、「やたらに食べたくなって」という言葉と一緒に、名のられなければわからない程に、まるまるとふとつた彼女に会ったのはその一か月後。更に六か月後、均整のとれた彼女に会った。そこには、ごく自然なかたちで自分自身を受入れている彼女の姿があった。そして、それは私にとって食べる事が体の成長維持を支えると同時に、心の成長とも深くかかわっている事を教えてくれる貴重な一つの体験でもあった。

(日本総合愛育研究所)

倉橋惣三への一つの接近(その二)

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本田 和子

(2) 「美登利」の女性像

「解かば足にもとよくべき髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬚もたげの、赭熊といふ名は恐ろしけれど、これを此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もと小さからねど縮りたれば醜からず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒繻子と染分絞りの昼夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の帰りに頸筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に

見たしと廓がへりの若者は申しき^{(*)1}」

女主人公「美登利」の物語世界への登場は、右のような文章で始まっていた。年齢は、数え年の一四歳、「育英舎」という私立の学校へ通う少女である。「大黒屋の美登利とて生国は^{(*)2}紀州」と紹介が続くが、「大黒屋」とは、新吉原の伎楼という設定であった。そこで、彼女の姉が、遊女として「お職を張って」いるのである。姉が身売りの時、目きゝにきた楼主にすゝめられて両親共々上京し、「大音寺前」の住人となったのだった。

「姉なる人が全盛の^{(*)3}余波」で、常に小使い銭には不自由せず、また、楼の主や廓関係の人々が大切に甘やかすこともあって、彼女は、持ち前の気っ風のよさと負けん気を遺憾なく発揮し、いままや、押しも押されぬ^{(*)4}「子供仲間の女王様」である。例え

ば、同級の女生徒二十人に、揃いのゴム鞆を買ってやったり、筆屋の店頭で売れ残った玩具を全部買い占めたり、その派手な振舞いは、「末は何となる身ぞ」と、秘かに見る人を案じさせるほどであった。

然し、美登利の行く末は、案じる余地もなく、既に、定まってお見える。「みどり」というその名前からして、彼女は、遊里の女たべく、運命づけられているのだ。初代杵屋六翁の長唄「松の緑」にも詞われているように、それは、「禿」に多い名前であった。

関良一は、「たけくらべ」を論じた稿の中で、「やがては遊女とすることを運命づけられ、『お職を徹す』『姉の（大巻の）跡つぎ』と予想され、期待され、卑しめられており、それゆえに禿に多い『美登利』という名を与えられている少女」という表現で、彼女をとらえている。

しかも、先に引用した彼女の描写の中で、美登利は、「こゝらあたりにも多くを見かけぬ」ほどの高い「ぬり木履」をはかされていた。朱、或いは黒に塗られた高い木履は、「こんなものは難岐らしくて良家の子女には相應しからず」とされている。女主人公の美登利は、作品世界に登場したその最初から、将来は、遊廓の女として春を露ぐべき数々の「徴」を身に帯びさせられ、但し、本人だけはその「徴」の意味を何一つ知ることもなく、余念なく

「大音寺前」の「子どもの時間」を楽しんでいたのである。

① 倉橋にとっての「美登利」

ところで、倉橋は、この美登利に、どのような接近を示しているのだろうか。彼は、先ず、物語の主要人物として「美登利、信如、正太郎」の三名を挙げ、「美登利」からその紹介を始めている。すなわち、本文の「解かば足にもとくべき……」から「身のこなしの活々」までを引いて、「すべてきびきびとした女の子」と位置づけ、「朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿」が似合うような、早熟な娘として把握する。その後、ゴム鞆のこと、芸人を呼びとめることなど、彼女の行状のあれこれを紹介しながら、「遠慮・がまん・ひかえ目という類の語は美登利の字引には見当らない。家庭の躰などということは愚か、何一つ心の訓練も受けたことのない気まま娘、女か男かわからない振舞のみである」と結ぶのである。倉橋の意識には、「勝ち気」で「お転婆」で「男まさり」の少女として、美登利が登場してきた、というこゝたになろう。

ここで注目させられるのは、本文を引用しながら「美登利」をまとめ上げていくときの、倉橋の筆の運びである。「解かば足にもとくべき髪」とか、「色白に鼻筋とほりて」など、次々と描き出される美女の絵姿を、倉橋はあっさり読み流し、「すべて

きびきびした」という性格の特色をそこから引き出そうとする。

また、美登利にとつて男というものが「さつても怕からず恐ろしからず」と映じていた箇所を引きながら、「女の友達は素より男の子の遊び仲間にもわがままを立て通し^{(*)11}」と解説して彼女の負けん気を強調し、先に引いたように、「男まさり」で、「お転婆」な少女の像へと結論つけていくのだ。あたかも倉橋の網膜には、この魅力的な美少女が、専ら「おきちゃん」で「放胆」なその個性においてのみ、像を結んでいたと言いかのようである。

但し、次の箇所だけは、明きらかに、彼の視線が、少女の容姿に注がれている。すなわち、「朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿」に向けられる彼のまなざしである。倉橋は、そのような「立姿」が「似合う^{(*)12}」とは、「年にしてはませた方^{(*)13}」であると言っている。然し、この部分は、現在の美登利の描写として読まべきであろうか。むしろ、そのような「立姿を、今三年の後に見たしと廊がへりの若者は申しき」と一続きの文として読むべきではないのか。つまり、遊びが果てて呆けた気分の若者たちが、幾分、漁色的な眼でとらえた「美登利の将来」なのだ。若者たちは、三年もすれば、この美少女は、間違ひなく紅燈の巷に夜を生きる女となっているであろうと予測し、それを無責任に楽しんでいたのであろう。そのゆえの「朝湯の帰り」であろうし、また、

そのゆえに、それは、小学生である彼女の生活からは遠すぎる。

にもかゝらず、倉橋は、そこに、現在の美登利の「湯上りの白い首筋」を見てしまった。このとき、美登利という「おきちゃん」で「男まさり」の少女は、ほんの一瞬だけ、倉橋の前にその美しい絵姿をちらつかせ、白く細いうなじに象徴される「女のもろさとはかなさ」を、そして、そのゆえの「たまゆらの美しさ」を、鮮烈に彼の心に焼きつけてしまったのではなかったか。

こうして、倉橋のまなざしは、男まさりの利かん気な、美登利の個性を見ながら、その視野の片隅では、東の間にうつろう女の美しさとあわれさを、素早くとらえてしまっている。従って、彼は、美登利の紹介を次の文章で結ぶのだ。「そのお転婆な男まさりがいつまでもそのまま続くであろうか^{(*)14}」と。

倉橋の前で、美登利は、その相反する二つの性格のゆえに、一きわの輝きを放っているように見える。すなわち、男にも負けず、男の子たちと対等につき合い、時にはリードさえする「男性性」と、白いうなじに象徴される「女性性」の二面である。彼女は、未だ、性の分化を迎えない、両性具有的存在なのだ。

考えてみれば、美登利という少女は、あらゆる点で、両義的に造型されているとも言い得る。例えば、彼女の結っている「箱熊」は、かつては娼妓の髪形であったが、明治二五、六年頃から一般

に流行し、本文にもあるように、「良家の令嬢」も好んでする結髪であった。従って、髪形に関しては、「良家の令嬢も遊ばざるゝぞかし」と断り書きがついているように、彼女は、普通の少女の列に並んでいる。然し、先にも述べたように、彼女は、「こゝらあたりにも多くは見かけぬ」高いぬり木履を得意気に履いて、常ならぬ女であることを証していた。要するに、彼女の容姿は、良家の子女と同じ清純な少女のそれでありつつも、遊里の女のそれでもある。

また、遊女の姉を恥じるどころか、逆に誇りに思うという非現実性に生きながら、一方では、小使い銭をまきちらして人気女王の座を維持するという点では、まさに、現世的通俗性の申し子であり、この意味でも、彼女は両義性を附与されている。

加えて、信如という異性に対して、彼女の中に芽生えた淡い恋情は、明きらかに二つの極の間を揺れ動いて、彼女を引き裂くのだ。倉橋は、その経緯を、次のようにとらえて見せる。「これは程経た後のことであるが、秋雨の夜を、例の筆屋の店に正太郎その他の友達と遊んでいる時であった。信如が店そとまで筆買ひに来て、内の集いに足ひきかえして帰っていったのを、『嫌やな坊主ったら無い、屹度筆か何か買ひに来ただけれど、私たちが居るものだから立聞きをして帰ったのであらう……嫌やな奴め、這

入って来たら散々と窘めてやる物を」と口にはけんどんに言いながらも、『帰ったは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見やる』とくぐりから顔を出して、『四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとほ／＼と歩む信如の後かげ』を、『何時までも、何時までも、何時までも見送』って、『美登利さん何うしたのと、正太郎に怪し』まれた、その美登利の心の底には何がある。』と(15)言うように。

もっとも、倉橋は、美登利のこんなありようを、両義のとらえるのではなく、『表出と内心とが全く反対な出方になる』と見なし、『極端に内気な子にも、極端な勝気な子にも得てありがちな通有性である』と(17)解説している。つまり、二つの相反する感情の間を、彼女が揺れ動き、引き裂かれて見ると、子どもに特有の表現の問題として処理するのだ。

にもかかわらず、彼は、最終的には、美登利の想いを「時雨にぬるる紅入り友仙のいじらしさ」で(18)象徴させようとした。とすれば、『男まさり』で『負けん気』の彼女が、楯の片面であり、雨の中で鼻緒を切らして難渋する信如のために、紅友禪の一片を握りしめたまゝ、近寄りもならず付んで、涙を含んだ瞳でその後姿を見つめる美登利の姿は、楯のもう一つの面だと言うことになる。倉橋の中で、彼女の恋は、やはり、その両義性において把握

されていたのであろう。

こうして、両性具有的かつ両義的存在である美登利の上に、ある日、「女のしるし」が与えられ、以後、彼女は、単一の性の下に生きることを余儀なくされる。それは、美登利にとって「子どもの時間」との訣別なのだが、同時に、「子どもの時間」を封じ込めたこの物語の終りの時でもあった。千束神社の祭礼で幕を開けた物語は、大鳥神社の酉の市と共に、その幕を降ろそうとしている。すなわち、美登利はその日、始めて結わされた「島田」のかけに面を俯せつゝ、「お酉さまは諸共に」という正太との約束も反故にして、家に閉じこもってしまう。彼女の上から、「人形と紙雛様とを相手にして飯事ばかりして居る」^(*20) 気楽な子ども時代は、永久に去っていったのであった。

そして、一輪の造花が美登利の住居の格子門に差し入れてあった霜の朝、信如もまた、「何がしの学林」^(*21)に入学すべく、「大音寺前」を後にしていく。物語の幕は、ここで完全に降ろされたのである。然し、読み手のまなざしは、幕の彼方に、一人の女の後姿を透視しようとする。それは、水仙の造花を片手に、おはぐろどぶを越えて廊の中へ歩み入る幼い遊女の絵姿なのだ。

倉橋の瞳に、このうつろいの前の一時が、そして、同時に、大人へと関門をくぐっていく少女の健気な姿が、限りなく美しい

ものと映じていたであらうことは、想像に難くない。彼は、美登利の急変に戸惑う周囲の人々の噂を引用しつつ、次のように説くのである。すなわち、「人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども母親一人は々笑みては、今にお俵の本性は現はれます。これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成ったと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり」この心的激変に対する、傍觀者の感想もまた長々しい、気のきかない科学的説明よりも、この短い辞句の中に尽されている」と。

倉橋もまた、美登利の「女らしい成長」を認めつゝも、「折角の子ども時代」を愛惜していたのであろう。

② 「娼婦性」と「処女性」

美登利の母が子言したように、彼女の「中休み」は間もなく終り、持ち前の「負けん気」がよみがえるのも、遠い日のことではあるまい。然し、その時、彼女の「細く清しい」声や「活々した」身のこなしが、「筆屋」の店頭に見られないのは確かである。彼女は、もはや、「大音寺前」の「遊び空間」とは、無縁的存在なのだ。

美登利は、常日頃、誇らし気にくり返していた。「姉は大黒屋の大巻」であり、「大巻の居すば彼の楼は闇」^(*23)である、と。そし

て、今度は、彼女自身が「大黒屋」を支えて、己れの肉体を犠牲に供さねばならない。美登利の幼い視線に、無上の価値と見えた遊女のなりわいとは、畢竟、肉体を売る賤業であり、人にさげすまれ、石をもて打たるゝ者であった。子ども仲間でさえも、時には、将来の遊びの対象として、好奇の眼を向けられることもあったのである。身に刻まれた「負印」に、気付かなかつたのは、一人、当の美登利だけだったと言うことであろうか。彼女の「子ども時代」の輝きが、一きわの鮮かさで胸に迫るのは、この所似であろう。

ところで、倉橋は、先に触れたように、この少女の名前を、教え子たちの同窓会名として選んでいる。彼にとって、「美登利」とは、彼の青春を彩る「忘れ得ぬ女性」、あえて言うなら「永遠のアニマ」だったと言うのだろうか。

文学作品などで、「永遠のアニマ」が、娼婦の形をとって現われる例は、必ずしも珍しいことではない。「罪と罰」のソーニャなど、その好適例であろう。肉体を売る娼婦の生は日常的秩序の中に位置づかず、「人非人」の「徴」を身に帯びて生きねばならない。そして、その無惨な生きざまのゆえに、逆にその「負の属性」が「正」に転化されて、「救済者」の役割をになわされるのであろう。「賤しい女」という蔑視は、彼女たちの身にされる

た一種の聖痕なのである。「聖遊女」というパラドックスが生まれる所似は、こゝにある。

倉橋は、この「聖遊女」に「永遠のアニマ」を見た。しかも、美登利の場合、その「娼婦性」は未だ肉体に現前せず、聖らかな「処女性」に覆われている。己れを開いてその肉体にすべてを受け入れ、「救済者」として機能する「娼婦性」を内に宿しながら、物語の美登利は、未だ汚れない処女のまゝに、聖らかに輝いているのだ。

倉橋が、保育者の団体名に「美登利」の名を冠した秘密は、或いは、このあたりに潜んでいるのかも知れない。保育者とは、己れを開いてすべてを受け入れる「女の性」を、清潔さの中に溶かしこんで生きる、そんな存在であると言うのではなからうか。

そして、倉橋のこの命名の背後には、明きらかに、彼の活躍した大正という時代の精神が呼吸づいている。すなわち、それは、人間の中にあるエロスの側面に、かげりのない光を当てていこうとする新しい文化の息吹きなのである。(つづく)

* 1・2・3・4・5・19・20・21・23 樋口一葉「たけくらべ」角川文庫版
* 6 関良一「たけくらべ」の趣向「解釈」第一六巻第五号
* 7 藤沢衛彦「明治風俗史」「たけくらべ」研究より引用
* 8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・22 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」倉橋惣三選集第四巻所収

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十一)

海老沢 敏

十一、日本人の歌として(承前)

この明治三十六年版の《讚美歌》の第三十三のナンバリングの右横には〈古今百七十五〉、第二百二十六には〈古今三百二十八〉と星印で注がつけられている(譜例ちおよびの参照)。これは

明治三十六年版の《讚美歌》に先立って、その前年の明治三十五年(一九〇二年)に日本聖公会によって編集刊行された《^{附古}今聖歌集》^(注56)所載の聖歌の番号を示している。日本聖公会第五總會

(明治二十九年)では、明治二十三年版の《新撰讚美歌》の大きな影響下にあった聖公会の讚美歌実践に対処するために、新しい讚美歌集の編集が決議され、五人の委員(のち明治三十三年の第

六總會で一名追加)が満六年の歳月を費やして努力を重ねた結果が、この《古今聖歌集》であった。この讚美歌集によって日本聖公会の統一的な聖歌集が生み出されたが、この曲集には合計四百十二曲が収められ、大正十一年に《改訂古今聖歌集》が刊行されるまで使用されるのである。

(注58) 《HYMNS NEW & OLD WITH MUSIC 附譜 古今聖歌集 明治三十五年》

《古今聖歌集》の第七十五は曲譜には〈175 Rousseau (Grainville)〉とあり、〈主よみめぐみもてく〉で歌われるが、〈礼拝閉会祝福を求む〉と指示されている。一方第三百二十八はやはり〈ルソー(グリーンウィル)〉の指示をもち、〈雑歌 信徒の旅路〉として〈わがおほかみよ つよきみてもてく〉にはじまる歌詞をも

っている。もともと《グリーンウィル》は英国において、英語讚美歌として歌われはじめたことからしても、この曲が、この讚美歌が日本聖公会でも採用されたのはむしろ当然であったというべきであろう。

讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンウィル》あるいは《ルソー》はこうして明治の三十年代後半から四十年代、そして大正年代を通じて歌われていったのである。《讚美歌》は毎年版を重ねていったが、大正九年には《縮刷讚美歌 第一編》^(注57)も刊行され、さらに小型版(大正十二年)も出版されて昭和にいたるのである。

(注57) 《著作権所有 縮刷讚美歌 第一編 委員》(大正九年、教文館・警醒社)

《讚美歌》ならびに《讚美歌 第二編》(明治四十二年刊)に対する改訂の要求が高まってきたのは大正末期のころであったといわれる。^(注58)大正十五年には基督教音楽聯盟が讚美歌委員会に対し、こうした改訂を要望し、それに応じて《讚美歌改訂委員会》が発足し、改訂の準備がはじめられた。じっさいの改訂作業は昭和三年にはじまり、足かけ四年をかけて新しい《讚美歌》^(注59)が出版されたのであった。今度の改訂にあたっては「各教派から委員を出して作業にあたったが詞・曲とも日本人を主査とし、詞主査は

由木康、曲主査は木岡英三郎で、別所氏と三輪氏も後見役として参加した」^(注60)ものであった。

(注58) 《覆刻明治初期讚美歌》(新教出版社) 解説所載、原恵
《日本の讚美歌史》(同解説一七ページ)

(注59) 《讚美歌 昭和六年十二月十日発行 教文館・警醒社》
(注60) 原恵《日本の讚美歌史》(一七ページ)

この昭和六年版《讚美歌》は讚美歌五六五、頌栄六、讃詠二四に聖歌隊用合唱曲九を加えて合計六〇四曲を収録し、明治三十六年版にくらべていちじるしい充実を示している。その性格はまた原恵氏によって次のように提えられている。「この歌集は当時としては聖歌学的にみてもかなり進歩的なもので、明治版《讚美歌》が明治初年以來の各版の選歌方針をほぼ継承して一八、一九世紀の英米讚美歌に著しく偏していたのに対し、古代・中世ラテン語讚美歌、ギリシア語讚美歌、宗教改革期のドイツ語讚美歌、フランス語詩篇歌を加え、さらに当時の新傾向であったアメリカの社会福音的讚美歌をいち早くとり入れ、また従来の日本人作品に新作を加えて全体の約一五パーセントにまで増加し、同時に、日本人作曲の讚美歌曲を加えた」^(注61)

(注61) 原恵、同右、一七ページ。

この昭和六年版《讚美歌》には、「しかし明治版からは大多数の

讚美歌がほぼそのまま継承^(注62)されてゐるにもかかわらず、本稿の主題《ルソーの夢》による讚美歌の旋律、いわゆる《グリーンヴィル》はここでついに姿を消すにいたるのである。こうして昭和年代に入ると、明治初期から長い間、讚美歌のチューンとして親しまれ、半世紀以上にも亘って、教会で歌われてきたこの曲はその生命を、すくなくとも讚美歌としては終えたのであった。もつとも、まったく歌われなくなったのではない。昭和十一年に刊行された《福音讚美歌^(注63)》には第一五〇《祈禱》としてへい、いのれよいのりて 言をうけよの 歌詞によつて、この曲が、明治版《讚美歌》とまったく同一の四声体のかたちで収録され、つづく第一五一《あゝ神よ荒野の このたびびとを》も、この旋律で歌われるよう指示されている。上段の曲譜には《Greenville》《J.J. Rousseau, 1752》と指示がおこなわれているのである。この《福音讚美歌》が、《グリーンヴィル》を採り上げた根拠は、しかし、けつして新しい観点からとは想像できない。

(注62) 原恵、同右、一七ページ。

(注63) 《福音讚美歌》編纂者 西条彌市郎、西条さわ 発行者 西条彌市郎 発行所 霊泉社 昭和十一年十月二十日発行

いづれにせよ、すくなくとも日本では讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》が歌われなくなつていった。

各派共通の聖歌集《讚美歌》から公式に除外されたからである。それはどのような理由によるものであるか。原恵氏が指摘しているように、この《讚美歌》は、明治版《讚美歌》が十八、九世紀の英米讚美歌に大きく拠つていた傾向を是正した点に特徴があつた。《グリーンヴィル》はその点で、きわめて典型的な十九世紀英国の讚美歌なのであつた。その点が除外省略の理由のひとつであると考えられるが、さらに加えて大きな理由があるように私には思われる。それは《グリーンヴィル》が、讚美歌の旋律として明治初年から日本で歌われはじめ、明治から大正年間にかけて歌いつづけられたと平行して、これもすでに縷々論じてきたように小学唱歌として、また軍歌として歌われてきたことである。もちろん、小学唱歌としての役割も、明治の後期においては変容し、パロディー化して、軍歌風に、あるいは牧歌風に編曲されることで変質し、当初の目的、意味を失なつていったというべきであらう。また、唱歌にしても、軍歌にしても、この《ルソーの夢》のような西洋から直接移入した旋律ではなく、それぞれの時代を反映して、あらたに作曲される旋律が重用されていく趨勢にあつたのである。しかし、とにかく《ルソーの夢》は讚美歌の曲節以外のかたちで、それも長年に亘つて人口に膾炙していったのだ。神を讃えるための讚美歌のメロディーが、たとえば敵を殲滅すべく

味方の兵士の士気を鼓舞する目的でたからかに歌われるものでも
あるとすれば、それは日本人の感覚にはあまりそぐわないもので
あつたらう。

そればかりではない。明治の末期にはじめられるこの旋律のも
うひとつの別の命運が、小学唱歌、そして軍歌としての寿命以上
の長い生命を享受してきた讚美歌としての《ルソーの夢》、すな
わち《グリーンヴィル》に、私たちの国日本では、けっきょく引
導を渡すこととなつたように思われるのである。

十二、幼な子の歌《むすんでひらいて》

明治三十四年に創刊された《婦人と子ども》が本誌《幼児の教
育》の最初の標題であることは周知のことであろう。日本の保育
活動、幼児教育活動に先駆的で主導的な役割を果してきたこの
《幼児教育研究雑誌》の第九巻第五号（明治四十二年五月号）には
池田とよによる《幼稚園に於ける幼児保育の実際》^(注1)なる一文があ
る。

(注1) 《幼児教育研究雑誌 婦人と子ども 第九巻第五号

明治四十二年五月五日発行 フレーベル会発行 二一ページ

——二七ページ。

この文章で池田とよは冒頭次のように語っている。「是は某幼
稚園に於ける最少幼児一組を担当せる某氏が一年間の受持幼児保
育状態を概括して記述したるものにて實際家の参考ともならんか
と茲に掲載することせり。尚本篇完結の上は順次二の組一の組
等年長者の保育状態をも統載する予定なり。」^(注2)

(注2) 同右、二一ページ。

筆者の池田とよ（のちの野間とよ）は女子高等師範学校を明治
四十一年に卒業し（理科）、母校に就職し、保母兼教諭として大正
十年にいたるまで勤務していたことから、この《某幼稚園》は女
子高等師範学校附属幼稚園であり、《某氏》は筆者自身であろう
と推定される。対象の幼児数は男児、女児それぞれ二十名ずつ、
合計四十名であり、入園の日から三日間は部屋で自由に遊ばせる
ことで幼稚園に慣れさせ、その上で一年間を五つの時期に大きく
分け、それぞれの時間割を紹介している。朝の《会集》と昼の
《帰り支度》は別として、保育内容は(一)《遊戯》(内遊、外遊)、
(二)《唱歌》、(三)《談話》、(四)《六球》、(五)《積木》、(六)
《環排》、(七)《摺紙》、(八)《画方》からなり、各週日に配当されて
いる。最初の《遊戯》の《題目及順序》を眺めてみよう。^(注3)

(一) 遊戯

一列行進

蝶

雁 かり 蓮の花 あまのはな

鳩 はと 鳩ぼつば

風車 かざぐるま 雀 すずめ 禮の遊び れいのあそび

結んで開いて むすんでひらいて 渦巻 うずまき

(注3) 同右、二三ページ。

私たちはここに《結んで開いて》がはじめて姿を見せたのに気がつくのである。《結んで開いて》が《遊戯》の中に位置づけられていることも注目すべきであろう。つづいて(二)の《唱歌》には《蝶》、《君が代》、《桃太郎さん》、《雪やこん／＼》などが合計一九曲挙げられているにもかかわらず、《結んで開いて》は《唱歌》としては収められていないのである。さらに《婦人と子ども》第三巻第四号(明治三十六年四月号)には《保育事項実施程度》なる課程表、そして第六号(明治三十六年六月号)には《幼稚園の遊嬉》なる上記課程表を解説している文章があり、そこから《一列行進》以下《渦巻》まで《結んで開いて》をのぞく全九種が女子高等師範学校附属幼稚園でおこなわれていたことが明らかとなる。(注4) とすれば《結んで開いて》は明治三十六年以降から明治四十二年にいたる期間に、この幼稚園の《遊戯》の保育内容として加えられたものということになるだろう。私たちは、この明治四十二年の記録から、《むすんでひらいて》がすでに明治時代から《遊

戯歌》として位置づけられていたという事実を知ることができるのである。もちろん、この資料には曲譜はつけられていないが、別の旋律ということはおよそ考える必要はないだろう。

(注4) 《婦人と子ども》第三巻第四号(明治三十六年四月五日発行)六一ページ―六二ページ。同誌第三巻第六号(明治三十六年六月五日発行)六五ページ―六八ページ。なお、第七号、第八号にも合計十六種の遊嬉の追加があるが(第七号、五五ページ―五七ページ、第八号、五九ページ―六一ページ)、《結んで開いて》は含まれていない。

池田とよは前記の文章で、幼児の有様を叙述しているが、遊びは大抵は部屋の中でおこなわれるが、天気がいと外に出ても遊びがおこなわれることを指摘している。そしてさらに次のように語るのである。「頓がて楽器に合せて会集に行く此時気も心も新らし。頓がて一の組を始め三の組に至る迄一人の指導の下に歌舞紅葉の如き手を差し上げて『蝶々』と余念なきも実に愛らし。」これはもとより《結んで開いて》を対象としているものではないが、この曲も同じようにして幼児たちが体を動かし、手を動かし、そして声を合わせて歌ったものであろう。

(注5) 池田とよ《幼稚園に於ける幼児保育の実際》二六一―

こうして《むすんでひらいて》は、明治の末年から、幼稚園の

保育活動の中に位置づけられていったのである。この歌が《幼
子の歌》、あるいは《幼な子の遊戯歌》として、さらに大正から昭
和へと、幼稚園都市の中で確実に、着実に普及していったことは
疑いない。たとえば昭和二年に刊行された高橋キヤウ著《唱歌遊
戯》^(注6)なる本がある。この著者は昭和四年から東京女子医学専門学

校体育科教室に属し、同年《行道遊戯》なる著書も同じ出版社か

ら刊行しているが、女子高等師範学校
附属小学校にも関係があったと思われ
る存在である。著者は《唱歌遊戯》で
合計十一曲を選び、曲譜を挙げた上
で、遊戯動作を解説しているのだら
う。

(注6) 高橋キヤウ著《唱歌遊戯》

(右文館・昭和二年)

その冒頭を飾るのが、ほかならぬ
《結んで開いて》なのである。ここで
はまず曲譜を掲げた上で、本文を引用
してみよう^(注7) (譜例1)

「一 結んで開いて

隊形

任意。例へば、一列円形又は半円形を作って、円心に向っても
よいし、好きな所に位置をとって指揮者の方にむいていてもよ
い。時には指揮者の方に向かなくてもよい。

方法

結んで、

拳を前に挙げて拳を握る。唱歌に連れて軽い振動が起るのであ

らう。——以後も——

開いて、

拳を開いて五指を伸ばす。

手を拍って、

拍手すること四回。

結んで、

再び前のやうに拳を握る。

又開いて手をうって、

前にしたやうに拳を開き、そして拍手をする。

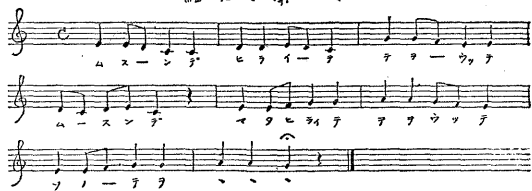
其の手を、

拍手を続ける。又は『手をうって』で拍手した後の姿勢のまま

まで、次に来る注文をしづかに聞いている。

譜例 1

結んで開いて



上に。(胸に、床に、其の他任意)(又は合図だけ)
いち早く手を上に挙げる。

注意

(一)しづかに歩きながら行ってもよい。

(二)何回も繰返して行ふ度毎に其の終には異つたいろ／＼の運動姿勢を要求する。そして練習がつめば随分複雑な要求をすることが出来るやうになる。即ち

(1)両臂に同じ運動を要求する。

(2)片方の臂ばかりに運動を要求する。

この時は、『其の手を』といふ時に、『右手を』又は、『左を』と限定しておく。

(3)片方ずつ別々の要求をする。

あらかじめ約束をしておいて其の約束を行ふ。

例 『右臂上の時は右手は下に』、『右臂上の時は左手は右手より少し下げて並行に奉げる』等。

他の臂は要求された片方の臂に釣合ふやうに任意に考案して行ふ。

臂ばかりでなしに、全身の調和釣合を考へ、要求された片方の臂を中心にして、同時に全身に変化を起すやうに

例 『右手を上に』との要求で

或人は右臂を上に挙げ、左臂を左斜下にして体重を一脚に托し、他脚を軽く後方に挙げ、左肩を落し体をそらして右を仰ぐマーキュリーの像のやうな姿勢をとるであらう。

或人は右手を上に挙げ左手を体の前又は腰にし、片方の足を前又は後に出し、左後下方を視るやうな姿勢をとるであらう。

或は又キュービッドが戯れに矢を投げるやうな姿勢をとる人もあらう。跪いて姿勢をつくる人もあらう。単に右臂をふり上げてものをうつ姿勢をとるのもそれでよいし、体操でするやうに、直線的に右臂上左臂左に挙げた膝を屈げ股を前に挙げるのもよい。

人によって千差万別、どのやうにでも行ふことが出来るものである。

(2)指揮者の運動を模倣する。

(3)反対観念を利用して——『上に』といったら『下』にとらせる。——此際組分けをして對抗して行ふと競争遊戯にもなる。

(4)凡てを全く行ふ人の任意にさせる。

此時は「上に」といふ時に単に合図だけをする事にしておく。

合図によって手許りでなく、全身の姿勢を全く任意に。」

(注7) 同右書、三ページ―五ページ。

この著書では、『結んで開いて』の遊戯歌としての基本的運動の説明と、さまざまな運動のヴァリエーションのサジェスションがくわしくおこなわれているのが特徴であろう。著者はなお、さまざまな考案が可能である点を指摘しつつ、教師が巧みに指導をおこなうよう勧め、この遊戯用唱歌の意義を最後に「かくして各種の運動に習熟させ、姿勢を工夫させ、表現的動作の基礎をつくることにつとめるやうに」^(注8)という言葉で表明するのである。

(注8) 同右書、五ページ。

このようにして、私たちは、『ルソーの夢』の旋律が、日本においては明治末期から昭和初期にいたる幼児教育活動、保育運動の中で、『むすんでひらいて』という〈遊戯唱歌〉、あるいは〈唱歌遊戯〉のかたちで、幼稚園の教育活動や小学校の教育活動の中に位置づけられたのを知るのである。

たとえば東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園の編になる『系統的保育案の実際』^(注9)(昭和十年)の〈年少組、

第一保育期〉のカリキュラムでは、〈保育設定案〉中の〈課程保

育案〉の〈唱歌・遊戯〉の項目の中で、〈第一週(四月八日ヨリ)〉の中に〈行進〉、〈円形を作る〉のあとに、また『蝶々』に先立って、『結んで開いて』は位置づけられている。^(注10)こうして、私たちの歌『むすんでひらいて』は幼稚園保育の中で、絶対必要欠くべからざる教材として、かならず取り上げられ、幼稚園児はだれひとり知らないものはない〈幼な子の歌〉となったのだ。それは幼稚園の園内でだけ歌われ、遊戯がおこなわれたのでもない。幼稚園を越えてたこの『むすんでひらいて』は、家庭でも、あるいはまた小学校の初学校でも、ひろく子供たちの歌としてはやされ、さらには母親や家族が、あるいは教師たちが子供たちに歌い

かけ、またともに戯れることで、大人までもが幼な子たちと無心の声や身体の動きを共有する類いまれな曲として、日本全国津々浦々にいたるまでひろく浸透していったのである。

(注9) 東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統的保育案の実際』(日本幼稚園協会・昭和十年七月)

(注10) この〈保育案〉は昭和十六年に改訂されているが、四月一日からはじまる第一週の〈課程保育案〉の中で、『結んで開いて』は変らぬ位置づけをもっている。

(つづく)

(国立音楽大学)

わたくしの

シルクロード ②



横張和子

刺繡

先日、シリアの国立ダマスカス博物館から考古学者のA・ブ
ニー博士が日本にこられました。地中海に近いこの国の方たち
は、ヨーロッパにはしばしば出かけられても、極東はなお遠い所
で、博士ご夫妻も、まだご存知ないとかで、今回はじめて、日本
を訪れたのでした。わたくしも久々の再会でしたので、ごあ
いさつに上って、一日、東京のお買物のお伴をしました。そのお
帰りの際に一枚のテーブル掛けを下さいました。それはダマスク
スの有名なオムマヤドモスクの近くのスーク(市場)で売られてい
る特産の刺繡布でした。なじみのあったそれは、木綿地に、一面
に花柄が鎖繡(チェーンステッチ)であらわされています。花柄と
いっても、規則性があつて、幾何学文風でもあります。つまり、
これもまたイスラーム寺院の壁面などを飾るアラベスクなのであ
りましょう。イスラームでは神の支配する空間に大きな影響を及
ぼすような人間や動物の表現は禁じられ、また物の自然な形を写
すこともよしとはされなかつたので、物の形は抽象的となり、そ
れが建築や工芸品の上に支配的となり、発展し、殆んど空白を残
さないまでにおおいつくしています。それはいかに無限の豊富さ

をもち、奔放に見えても、けっして混乱があつてはならないのです。たしかな計算や幾何学的な感覚が基本にあつて、それが規範となつて、面装飾の構想を律しているのです。このテーブル掛けの花模様にもそうした特徴があると思うのですが、それはまた手なれた鎖繡の手法で一層リズムミカルな調子をそなえています。

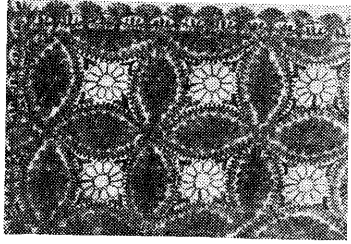
ダマスクスは聖書ではダマスコ Damascus、アラブ人はディマンユク Dimashq と呼び、世界最古の町として知られていますが、そこは古いメソポタミアの文化を背景にした、オリエントの濃厚な特質と共に、ヘレニズムの強烈な光被をも蒙つており、また初期キリスト教の舞台でもあります。こうした文化の混在は町の中を歩いていても至るところにみられ、人々の生活の中に息づいています。このテーブル掛けの縁飾りのようなところにも見出されます。花模様のテーブル掛けにはどれにも、あるきままつた形の縁飾りがぬいつけてあります。日本の菊の花を側面からみたような花形を弧を描く線をつなげた連続模様です。これは今日、パリのルーブル博物館所蔵のアッシリア・ニムルド出土の浮彫にみられる聖樹や、ベルリン国立博物館蔵のバビロン王ネブカドネザル二世の王座室の彩釉煉瓦の装飾などにみられるものに似ています。この原型はこれらの古代の形に求められるといつても過言でなく、この町では悠久の年月の過去が、現在に生きているのです。

さらにこの鎖繡という刺繡の技法をみても言えそうです。

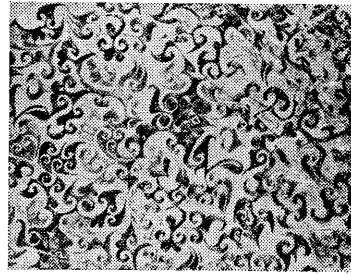
鎖繡(チェーンステッチ)は一本の糸で輪を作りながら布の面にぬいつけていく技法ですが、これまで世に紹介された中国の古い刺繡では鎖繡の技法が圧倒的で、この技法によるものがあれば、即座に、中国の産と識別し得るほどであります。シリアのパルミユラのローマ時代の遺跡の墓からも刺繡布が出土しました。

しかしその刺繡布は様式的にも文様のにもまた技法的にも相違した二種類が認められました。その一種は、明瞭に鎖繡です。美しい浅萌あさほの色の薄絹の上に、赤、薄紅、藍、緑、黄などの彩糸を使って、幻想的な鳥や動物(竜)の模様を、きわめて緻密な鎖繡の技法であらわしています。独特な文様とその精巧な手法から、これら確実に漢代中国の刺繡とされました。このような鎖繡の刺繡の遺品はパルミユラばかりでなく、その美事な作品を、わたくし共は近年の中国の発掘事業の成果の中に見出すことができます。

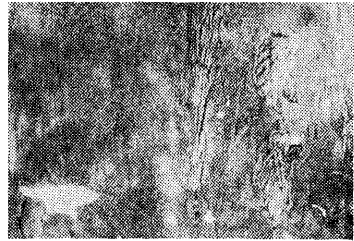
これは日本でも公開されたものですが、今から二千年ほど前、つまり前漢初期のもので、長沙市馬王堆の墓が一九七二年に発掘されたのですが、三重の木槨、三重の木棺の中から、およそ五十歳ぐらいの女性があたかも生けるが如き状態で発見されました。それは副葬されたかめの口を封じた粘土におしてあった印文(封泥)により、前漢初期の長沙王の宰相であつた人の夫人で



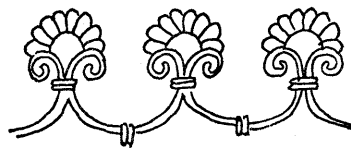
▲ダマスクスの刺繡（現代）



▲中国の刺繡（B. C. 3世紀）



▲バルミュラの刺繡（A. D. 3世紀）



▲バビロンの彩釉煉瓦壁画の
ロゼット文つなぎ模様

あることが分りました。副葬品の品物はどれも優秀な作品で、当時の技術水準の並々でない高さは驚くべきことでありました。多量に発見された絹織物もまた多彩にして精巧で、これらにより世界に先駆けて発達した絹の紋織物の技術が、すでに前漢の初めごろには完成の段階にあつたことが示されたのです。中でも庄巻であつたのが、薄地の平絹や羅、綺にぬいつけられていた鎮繡の刺繡です。それは中国に独特な、渦を巻く雲形の文様を、極めて精緻な手法で、ぬっています。このような布は、刺繡によって厚味を生じ、流麗に、躍動に満ちた雲文様はまた古代の神秘をたたえ、おかしがたい気品をそなえています。

刺繡のある布は錦と共に、その壮重な豪華さのゆえに、貴ば

れ、中国周辺の民族の首領にとつては、それは圧倒的な魅力であり、渴仰的であつたのです。それらは北蒙古のノイン・ウラの匈奴の墓から、また遠く北ペンベリアのアルタイ山中のバジリクのスキタイ人の墓から、また中国の勢力が消長した西域の国々の遺跡から、数多く発掘され、いずれも同一の技法であり、一見して、中国の産であることを認めさせます。これに対してバルミューラではもう一種の刺繡布が出土していることは前述しましたが、今、それについて言えば、それらもまた薄い地の平絹や平地の綾にぬいつけられています。地になっている絹は中国からもたらされたものです。

しかしその刺繡はとみれば、それはこれまで述べてきた中国の

それとはかなり異った印象を与えます。まず模様ですが、これはどれも植物文様です。ある図柄について言いますと、その特徴は模様の左右の相称性で、一本の幹を中心に、その両側に、先端が細く上がった穂のようなものをせた枝が、三〜四段、規則的に張り出し、その中間に、双葉がようやく芽を出したというような図です。このように顕著な相称性というのはオリエントの美術の中でしばしば指摘されるもので、この植物文様の祖型には、先ほど述べたアッシリアの聖樹の図も考えられます。これらの刺繡布はバルミユラの塔墓に埋葬されていた人々の遺骸を包んでいたものなのですが、刺繡は特に、死者の胸の上のあたりにあったという事です。これは生命の樹でもあり、死者の生の復活をねがって、ぬいつけられたものかと解釈されます。ところで、その技法は、非常に大雑把な手法で、しかも手なれた仕事振りで、用糸は絹糸の太いものです。この刺繡のやり方を詳しく調査した R・フィスター Pister によれば、これもまた中国の鎖繡のバリアントであるという結論です。大まかな刺し方であること、一本の糸を二つに割って輪を作って、鎖繡風にしてあることなど、実はそれは当時全く貴重な絹糸を経済的に効果的に使うための工夫であったのです。

鎖繡の技法のそもそもの創始はどこであったのか、一説には、

前四世紀ごろのものがクリミア半島の古代ギリシャ人の植民地の墳墓から発掘されていて、スキタイ人が発案して、中国にも伝えられたとされていますが、なお定説はなく、今、ここに現代のシリアの鎖繡のあるテーブル掛けを前にして、この技法の源流が、中国の刺繡にあるとすれば、そのモデルを運び来たのは「絹の道」であり、二千年も前の技法が、こうして、西方の地に根づいて、その地の人々の伝統工芸の技法となってしまうことは面白いことだと思ふのです。

わたたくしはこの原稿の途中で、関西の方に行く用事ができました。その一つに、大阪のかつて万国博覧会が開催された跡地に建設された国立民族学博物館をお訪ねすることも含まれていました。二階、展示場には各国の民具や織物や刺繡などが豊富に陳列されてありますが、中で、中央アジアの部では、ソ連邦ウズベク共和国の人々の手になる刺繡が、やはり鎖繡であることを認めて、古代の絹の道に沿った国の人々や、またその終端の国であったシリアの人々が、同じ技法を得て、もはや全く自己の伝統にしてしまっていることを知って、シルクロードが果した東西文化交流の役割の大きさをあらためて知ったことでした。もっとも、そこには、例えば図柄などにその民族性が色濃く示されてはいまふけれど。

(古代染織史研究家)

遊びと子ども の 発達 ⑤

(続・歩行跳躍疾走の遊び)

加古里子

〈図形の変化〉

鬼ごっこの遊びに於て、弱少の子が強大な子と共に楽しむ方法の一つとして休憩所乃至安全地帯が描かれ設置される。その呼称をとって「家鬼」「やすみ鬼」「宿鬼」とよばれる。一旦その安全地帯に逃げこんで、なかなか外へ出たがらない逃げ手に対し、鬼の方は追い出なければならぬ呪文をとなえる「追い出し鬼」が行なわれる。「へいっさんばらりこ、出ないと鬼(又は出ると鬼)」などということばがいろいろと案出される。

この安全地帯の数が二、三とふえるに従い「二宿鬼」「三宿鬼」と呼ばれるが、前記の呪文やかけ声によって、それまでの所から他の地帯へ移動する事が必要で、その際鬼が逃げ手を捕える「場所かえ鬼」が行なわれる。

こうした安全地帯の大きさや形状は、鬼ごっこが行なわれる周辺の状況や、地形、或いは子ども集団の好みやその時の社会の流れなどによって、いろいろ大小複雑に変化変転する。その形や印象により「丸鬼」「島鬼」「釜鬼」「ひょうたん鬼」「でべそ鬼」というものがあり、その内部につけた通路や線形によって「十の字

鬼」「井の字鬼」「中の字鬼」「田の字鬼」「車鬼」「車輪鬼」「ミカン鬼」「花形鬼」「ひまわり鬼」「八つわり鬼」と呼ばれる。

こうした図形の中に多くの逃げ手が入っている時の互いの競合牽制の仕方、或いは外にいる鬼の捕まえ方によって「おし出し鬼」「つき出し鬼」「おしくら鬼」「ひっぱり鬼」などがあり、ひょうたん形の二つのふくらみで、前述の「宿がえ鬼」を行なう「ひょうたんかえ鬼」が行なわれる。又「田の字」や「くるま」の図形の中央に鬼がいて、周辺を片足でまわる逃げ手がくつをそっと奪還する「くつとり鬼」や、足をそっと交換する「ひよこ鬼」は、注目すべきものと考えられる。

〈鬼対逃げ手の対抗〉

前述した「からかい鬼」の方法や鬼の逃げ手に対する呪詛のこぼの発展として、対立抗争の形をとり、互に歌やはやし言葉をいい合ったり、時には問答や即興劇を挿入し、結果として最後が「追いかけ鬼」の形をとる一群のものがある。

例えば序幕として「へことしのレンゲはよいレンゲ」という歌があり、それを全員でうたった所へ鬼が「いれて」と来る。「いや」「川につれてったげるから」「川坊主がいるからいや」等という問答があり、遂に同意し、再び全員の歌と踊が続けられる。そ

の終りに、鬼が「わたしかえる」』として」から、食事の内容の問答に移る。「たいのさしみ」「えびの天ぷら」等が出た後「へびの黒やき」「かえるのすもの」などとなる。そしてその子が帰る際、「誰れかさんの後にへびの影」というのろいの声が投げられる。「わたしのこと?」「ちがう」という問答がくり返された後「そう」という確認と看破によって、鬼が全員を追いかけるという形をとる「ことしのレンゲ」という遊びがある。

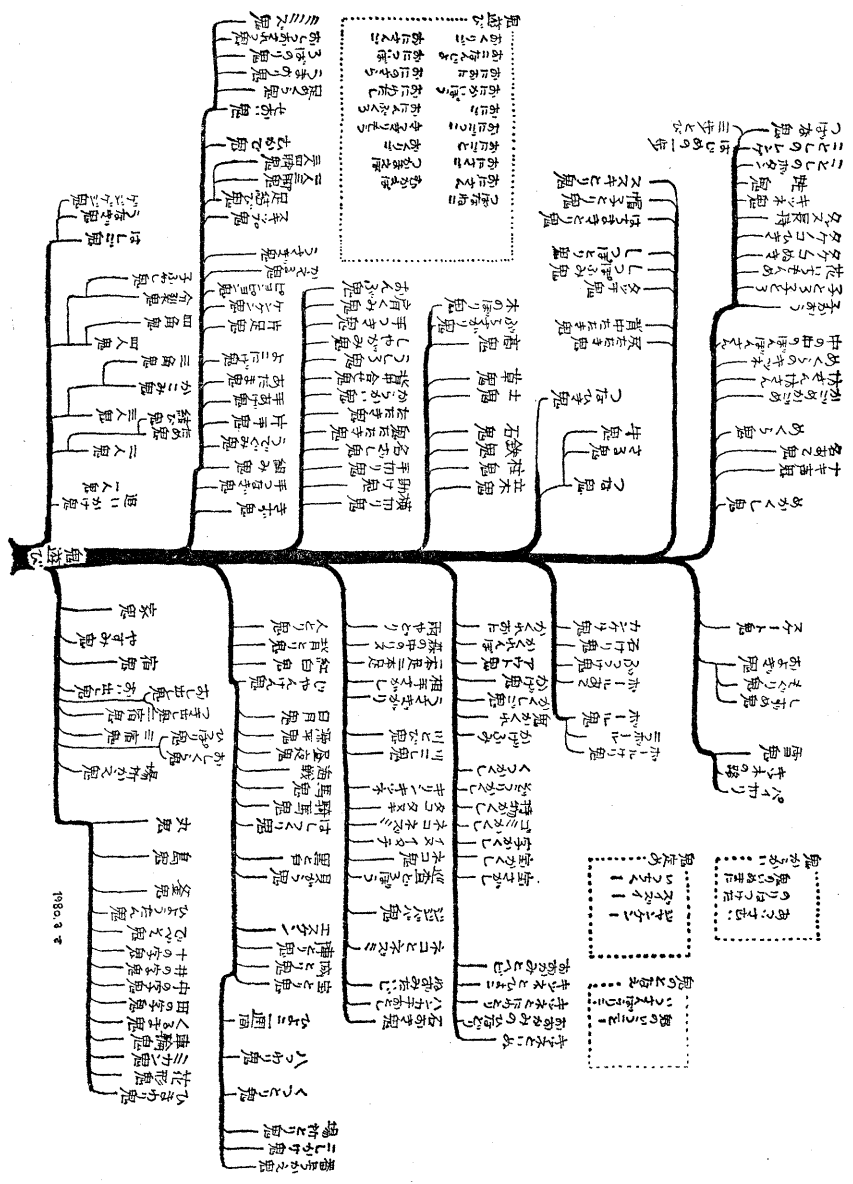
この「ことしのレンゲ」は「つんつんつばな」「ことしの牡丹」「坊さん坊さん」「めくらのきつね」「ゴージャゴージャ」「中の中のぼんぼんさん」「花いちもんめ」「ダンス長持」「ねこかい」「通りゃんせ」「さらわたし」等へといろいろな変化形をうみ出すに至っている。

〈集団の変化〉

こうした多人数による対抗形は、紅白二軍による人とり形に発展してゆく。その方法の違いによって「じゃんけん鬼」「海戦」「陣とり鬼」「城とり鬼」「場所とり鬼」となる。また「エスケン」「騎馬鬼」「宝とり」などという形をも生み出してゆく。

その結果の一つとして、特に学校や園など指導者と子どもがいる場では、リーダーの合図や判定が大きな遊びの要素となる形を

▼鬼遊びの系統樹的分類



1980.3.2

うみ出してゆく。「日月鬼」「源平人とり」「貝がら鬼」「キツネとキリン」「たことたぬき」「ねことねずみ」「巡査とどろぼう」などがこうしたリーダーの発声選択が大きな要件となる。こうしたリーダーによる遊びの形式は欧米に於いては盛んに行なわれ、それが日本にも移入される結果となっている。

以上の概要からでもわかるように、本来は遊びという年齢や体力や条件、状況が統一されていなかったり違う事が本来である場で、楽しさ面白さを共に享受しようという時、さまざまな工夫や考案がされて来た事に気づく。その分類を系統樹的に描くなら図(前頁参照)のようになる。

この図からわかるように、歩行跳躍疾走能力を得た子ども達は、その力を充分使いこなし、それからもたらされるものを、体で、筋肉で、心で、頭脳で、全て得たいという切なる要望欲求の結果、基本型だけでも二百種をこす「鬼ごっこ群」を創出案出して来たという事である。変形を探るならその数は千をこえる事だろ。その力を知り、理解せねばなるまい。

- (2) 「日本の子どもの遊び」青木書店(昭54)
- (3) 「教育評論」日教組(昭54・11月)
- (4) 「体育科教育」大修館書店(昭53・8月)



引用文献

(1) 加古里子「遊びの四季」じゃこめてい出版社(昭50)

現職研究レポート

その四 M幼稚園の場合

太田留美

現職研究レポートも第四回目に入った。私達はこれまで、幼稚園を訪問するたびに、幼稚園にはそれぞれ、その園固有の園文化を持っているという事を感じさせられてきた。

今回、レポートするM幼稚園も、園文化といった点において、極めてユニークな特色を持った幼稚園である。

M幼稚園の公開観察日は、昭和五十三年一月二十三日であった。冬の最中ではあったが園庭の日溜りや、日当りの良い部屋のあちこちで、のんびりと遊んでいる子ども達の姿が見られた。

園庭は広く、ホールや保育室もゆったりしており、八十六人の子ども達が遊ぶには、十分、恵まれた環境にあると思われる。が、それにもまして、私達の目を引いたのは、幼稚園の中にある

美しい物の数々である。

手作りのぬいぐるみ人形や玩具。ホールの片隅に置かれた本物のはた織り機や手染めの糸。窓際を飾る観葉植物。壁にかけられた大小の油絵。磨きあげられた廊下、庭に建てられたメルヘン調の子どもの家等々。

これらのものが、とりも直さず、M幼稚園の園風を作り上げているかのようである。

M幼稚園は、他の幼稚園のように、先生方が、朝、園にやって来て、夕方、帰って行くというのではなく、園を開設されたO先生と家族の生活がそこにあって、子ども達を迎え入れるという形である。

また、O先生姉妹は、油絵や織物など芸術的なものに造詣が深く、そのような、美しいものを追求していこうとするO家の家風といったものが、保育の中に自然に入り込んでいようである。さて、このような特色のある園の中で、子ども達はどのように遊んでいるのであろうか。

この日、観察者たちは、同じ遊びが淡々と長く続くこと、しかも、幼稚園では当り前とも思えるトラブルがほとんどなく、穏やかに続いている事を不思議に思った。

この穏やかさはどこから来るのか。このトラブルのなさは何なのか。素晴らしい事なのか。物足りない事なのか。これらの疑問を抱え、長く続いている活動に焦点をあてながら、M幼稚園の保育の特色を探ってみることになった。

長く続いている遊びとして、三歳児、年中児、年長児の三つの事例をあげてみよう。

事例1 三歳児の遊び

一月十六日：Nが昨日から欲しかった自動車をO先生にもらい、嬉しそうに持っている。「積み木で道路を作ってみたら」と言うのと、すぐに大積み木を運び、部屋の中央に長い道路の

ように並べた。そこへKが加わる。

二人で木の車を沢山並べて遊ぶ。片付けの時間になり、部屋の隅に積み木と車を片付けておいたが、M子がそれを見て、トンネルのように並べ替えて帰った。

一月十七日：M子は登園して来るとすぐに「あったあった」と言つて、昨日、作つて帰つたトンネルに車を走らせ「一号車！ 一号車！」、「火事ですか」などと言いながら遊んでいた。そこへ、KとOが入つて来て、いつの間にか「カレー屋さん」になり、「先生、カレー食べに来て」と誘いに来る。何もないのだが、作るまねをして出してくれる。

しばらくすると、「かるた」をしていたR子が「ここは動物園でしょう」と言つて入つて来る。「ちがうもん」と反対していたが、話がまとまり、皆で、ホールからぬいぐるみの動物を一個ずつ運んできて、積み木のすき間にどんどん入れていく。

このぬいぐるみ遊びが終わらないうちに、「きつぷ」と言いながら、紙を小さく切つて、切符切りが始まった。

ここで、片付けの時間になったが、自分達の場所である印なのか、紙に字のようなものを書き、積み木やボードにベタベタと貼りつけていた。

一月十八日：Mは登園して来るとすぐに、「N君、やろうよ」と誘って、「カレー屋」を始める。そこにKとA子が加わる。そのうちM子が抜ける。そこで、積み木の場所の雰囲気が変わり、「ここは警察だ」とNが言い、A子は「お店屋さんなのよ」と言っていて遊んでいる。同じ場所で、それぞれ別の遊びが続いていた。

(Ki先生の記録より)

三歳児の遊びは、同じ積み木を並べた場所で、自動車遊びがカレー屋さんになり、動物園になり、切符作りになるというように、別々の遊びが重なって、一つの流れとなって活動が続いている。また、一人一人が、まるつきり別の事をやっっているが、同じ場を共有していることで、つながっている場合もある。まさに、混沌とした始源の状態で、ばらばらと遊びが起っては消えていく様子が、この記録からうかがえる。

事例2 ブロック遊び（年中児）

入園したての四月、遊びがなかなか見つけれない不安定

な状態の中で、多くの男児が求めた遊びがブロックだった。段々と月日を経て行くうちに、他の遊びに興味が移って行き、一学期の終り頃まで残ったのが、現在でもブロック遊びを続けているGとTだった。二学期になって、他の物も使って欲しいと思ひ、箱制作に誘って見たが、ほとんど見向きもしなかった。そのうち、転園してきたYとThも加わり、ますます盛んになってきた。

一月二十六日：Tは登園してすぐにブロックの所へ行き、自分の作ったブロックに、人形が乗っていないのを見て、引き出しの中から人形を捜し始めた。しばらくして、猫の人形を取り上げ、自分のブロックの上に乗せると、他の遊びを始めた。

一月二十七日：Thは登園すると、まず、ブロックの所へ行き、自分のものを確認すると、Gと一緒に映画ごっこをして遊び始めた。

この時、TやThが、必ず、登園するとすぐに自分のブロックを確認することから、このブロックが無かったらどうなるのかと思ひ、引き出しに片付けておいた。

一月二十九日：Tは登園してすぐに、ブロックの所へやって来た。ブロックと人形が失くなっているのに気付くと、引き

出しを捜し始め、自分の猫の人形を見つけ、他の子ども達と遊び始めた。その後、わずかな時間で、急いでブロックで人形をのせる台を作って、棚の上にのせておいた。

Thも、同じ様に、人形とブロックが失いのに気付くと、やはり引き出しを捜して、自分のベンギンの人形を見つけると、ブロックを探し始めた。やっと見つけたブロックが壊れていたで、二つの座席のあるものに、改良して作り直した。ブロックに人形をのせて、しばらく仲間と遊んで、いたが、他の遊びに移った。その遊びの間中、そばにブロックと人形を置いていた。そして、片付けの時、棚の上にのせておいた。

(Ko先生の記録より)

このブロック遊びは、えんえんと一年近く続いている遊びであるが、この記録に見る時期においては、ブロックで遊ぶというより、自分のブロックと人形を確認して、それから他の遊びを始めている。そして、遊びが終った時、ブロックと人形を棚の上にのせておく、彼らがブロックで遊び始めた一学期の頃から、「先生、これとっておいて」という言葉があり、それらのブロックは次の

日も次の日も、大切にのせて置かれたということである。その事は、また、ブロックの場所が、彼らの場所として、暗黙のうちに認められる事になり、彼らの安住の場になったと思われる。

一年以上もブロック遊びが続いてきたのは、その日、遊んだものが、次の日もそのままのて置かれたという状況が可能であったことによるのではあるまいか。

事例3 お花やさん(年長児)

十月中旬、秋になり、庭にいろいろな植物が豊かにあつたことがきっかけとなり、H子、M子、N子の「お花やさん」が始まる。

十一月初旬、近くのお寺に散歩に行った時、「お花やさんの葉のお皿が、二学期の間中、このグループの遊具となった。ホールに、積み木やマットを使ってお店を作る。長イスの上で、木の葉にのせた草花や木の実を色とりよく並べ、「お客さんに来て」と皆に呼びかける。

積み木のコーナーを、男の子達に取られたため、長イスだ

け持つて、ままごとコーナーへ移る。

クリスマスの頃、製作したり、劇などで忙しい時も、時間を見つけては、ままごとコーナーに集まり、「花やさん」を続けていた。

一月十日：始業式の日、H子、M子、N子の三人は、ままごとコーナーへ飛んでいき、「花やさん」の店開きをする。

一月十二日：庭のささんかの花びらを集める。

一月十三日：はまぐりやあわびの殻に絵を描いていたグループから、貝をもらって、その中に花びらを入れ、張り切って売り始める。

一月十六日：二学期からずっと、ままごとコーナーを占領しているため、他の子ども達が遊べない事も気になって「お花やさん、外の子どもの家に引越しませんか」と声をかける。「みんなからよく見えるし、お客さんが沢山来てくれるかもしれないよ」と言うと、「そうする」と言っ、引越しが始まる。ままごとコーナーの長イスの上に、小さな紙切れがあり、「おはなやさんは、こどものおうちにひっこしました。そとにきてください」と書いてあった。

次の日、三人は、外の子どもの家に飛んで行ったが、「ストープがあればいいなあ」と言っ、すぐに戻って来た。

その日から、ままごとコーナーに行っても、「花やさん」は始まらず、人形の洋服づくりに夢中になっていた。

人形の洋服づくり、ダンボールの中に入って遊ぶ、色水で遊ぶなどの活動が展開されたが、あまり深まった遊びはなかった。

一月二十四日：ドッジボールに、年長のほとんどが参加して遊んだ。片付けの時、ままごとコーナーで、ことり組（三歳児）の子ども達が遊んでいるのを見つけ、H子は、自分達の「お花やさん」の道具をかき回したと、ことり組の先生に抗議に行った。

（O先生の記録より）

これは、年長児の半年以上続いている「花やさん」の記録である。

H子達は、「花やさん」をずっと続けるにあたり、何度かの引越しを余儀なくされているが、たいした抵抗も示さず、すんなりと移っていく。また、園でドッジボールのような遊びが流行ると、その遊びに加わり、「花やさん」は休業する。彼女達は、極めて自然に遊びを続けているようである。消えたかに見えた「花

やさん」が、本人達の中には残っていて、再び始まる事もあり得るわけである。

これまで見てきたように、M幼稚園の保育は、一日の中で、くり返し続いていく遊びがあり、また、三年間の保育の中でも、何度か出たり入ったりして続いていく遊びがある。そのような、ゆったりした、穏やかな保育がM幼稚園の特色である。このような特色がどのようなところからくるのか、話し合いの中で出された意見・感想をここに掲げてみよう。

今まで訪問してきた幼稚園でも、遊びが長く続いている園はあったが、M幼稚園はどこか違う。同じ遊びが続くにしても、わーっと乱れることがない。それはそこに住んでいる人の匂いがあるからではないか。二人の先生以外は同じ家族として生活しているので、家庭の匂いが強く、それが無意識のうちに、子どもに感じられるのか、何か統制されたものになるのか、それが安心感につながるのかしらと思った。

(H幼稚園 N先生)

以前、O先生は「どうせやるなら、私の好きな事だけをやっている幼稚園をつくりたい。」と話された。自分の生き方を素直に保育の中に位置づけて、そこへ子ども達が入り込んでいる。つま

り、幼稚園のいろいろな教育的な目標や枠組に入れるより、O家に「ごめん下さい」と子どもが入り込んで、保育者もそこで自然に生活を展開しながら、子どもに触れている。そこで、出き上ったのが幼稚園の和やかさ、のんびりさにつながっているのではないかと思う。

(H先生)

生活も保育の場もみんな、子どもと一緒にやっていっているという事は、他の幼稚園と違うところである。また、やろうと思っ
てできることではなく、なかなかやれない事であろう。こういう
保育はユニークでもあるし、本来の姿であるかもしれないと思っ
た。

(T先生)

現職研究のゼミを終えて、M幼稚園のO先生は、「今まで無意識にやって来た事が、他の幼稚園の先生方の観察を通して、いろいろな角度からの感想を聴くことで、逆に自分の園の特色を意識化させられた」と言われた。

そういう事を踏まえて、また新しい家風づくりに励み、独自の園文化を作って下さることでしよう。

(宇部短期大学)

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究(三十四)—

津 守 真

Yはどのようにして幼稚園にゆくようになったか

五歳児の三学期、Yは幼稚園で最も活潑に遊ぶ子どもの一人である。

この同じ子どもが、一年前の四歳児の終りころには、幼稚園にいくのを嫌がっていた。このことは、このシリーズの中で前に記したことがある。(七十八巻一号)どのようにしてこのような変化が生じたのであろうか。

この間には毎日の具体的な生活が連続してあることはいうまで

もない。しかし、何か特別な試みや方法が効果をあげたというようなことはない。もっと子どもの心の奥で、子ども自身の世界が変化していったのであろうと思う。そのことをこの子どもの一連の描画が示してくれるので、この時期の描画からこのことを考えてみたい。

外出のテーマ

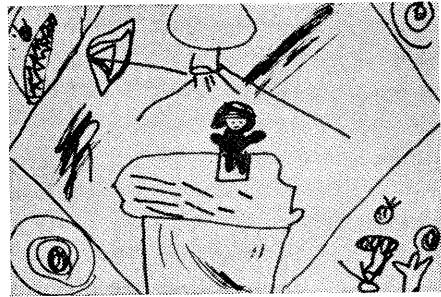
Yの幼稚園入園前後の描画を前に示したが、入園を楽しみに待っていたころ、友だちと手をつないでいる描画や戸外のテーマが多かったのに、入園後の描画は、囲みの内側に人を閉じこめる描

画や、家の内部のテーマがYの描画の大部分を占めるようになっていた。

いま、その後の描画を並べてみると、内部の描画がしばらくつづいた後、再び外出のテーマがあらわれるのを見ることができ。子どもが自分から描きはじめた描画は、そのときのその子どもの内心を吐露したようなもので、一枚一枚、手にとってみると、豊かに可愛らしいものを感じさせられる。そうした描画を並べてみると、更にそこに一貫した心の動きを観察できることがしばしばあって、それは驚く程である。子ども自身、自分の考えを線や形や色に表わしてゆくことによって、自分で確かめ、また模索しているのだと思う。一枚一枚がその過程だから、一つのテーマに分類されるような場合でも、それぞれ違ったヴァリエーションを示していて、全く同じ描画はひとつもない。子どもはええをかくことによって、一歩ずつ、自分の階段を乗り越えているのだと思う。

Yの描画は非常にたくさんあるので、ここではごく一部分しか示すことができない。

五歳児の一学期、六月三日に描かれたものが図1である。女の



▲ 図 1

子が囲みの中のスタンドの上に一人で坐っている。上から電灯の光が照しているけれども、囲みの外には、三角の歯の並んだ怪物や、その他得体の知れない生きものが四隅に描かれている。女の子は囲みの内では安全だけれども、外部は未知の脅威に囲まれているように感じられていると見てよいであろう。

図2は六月二十四日の描画である。女の子が部屋の内部にいて、家の中の小道具に囲まれている。水道の蛇口、食器戸棚、衣類戸棚、卓子に椅子など日常的な物が描かれ、戸棚には把手がついている。天井には華やかな電灯が輝やいている。兎の女の子は



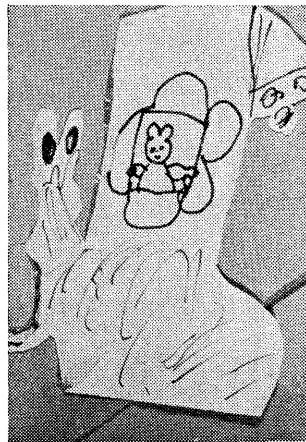
▲ 図 2

手にハンドバッグを持っている。内部にいる女の子の明るい幸福感が感じられる。

図1を見ると、幼稚園にいきたくない子どもが内部に逃避しているように見えるけれども、これを逃避や退行とのみ見ることは妥当でないだろう。ほとんど同時に、図2のような、内部の明るさや温かさを楽しむ描画が多く見られるのであって、内部は希求される価値となっている。内部と外部とは、いずれかがいずれかに従属するものではなくて、両者は共に、それぞれの方向において



▲ 図 3 (1)



▲ 図 3 (2)

て、深められ、追求されてゆく性質のものであろう。ただし、一つの時期をとり出してみると、いずれかの方向に傾斜がみられる。

図3(1)(2)は、Yが五歳児の二学期の末、十二月二日に描いたもので、この時期にあらわれた最初の外出のテーマである。図3(1)では、家の外に、兎が出てゆく。靴の形をした家のつき出した屋根には、電灯がつけてあり、外部を照している。こういう細部に

いたるまで、子どもの意味ある世界が溢れ出しているのも、驚く程である。Yはこれを描き終ると、はさみで切り抜き、裏側に図3(2)を描いた。これは兎が家の内側から窓を開いて外を見ているところである。同じ兎が外に出てゆく状況と、家の内において外を見ている状況とを二つかき並べているのは、二つの心の状態を自分で認識していることを示すものであろう。

図4(1)(2)(3)は、同じく五歳児の二学期末、十二月六日に描かれたもので、一枚の紙が数個の区画に分けられている。「おでかけ」と云って(1)の左上からかきはじめた。

一枚目

「おでかけ

おでかけ やつぱり 大すきだ。おでかけ、たのしいおでかけ。

ジャンパーきていくよ。(上段左)

あれ、きのこのおうちみたいなおうちがあった。(上段右)

そこに女の子が住んでたよ、とってもかわいい女の子。(下段左)

あれ、お豆みたいなはっぱ、はっぱかな。よくみてみよう。(下

段中)

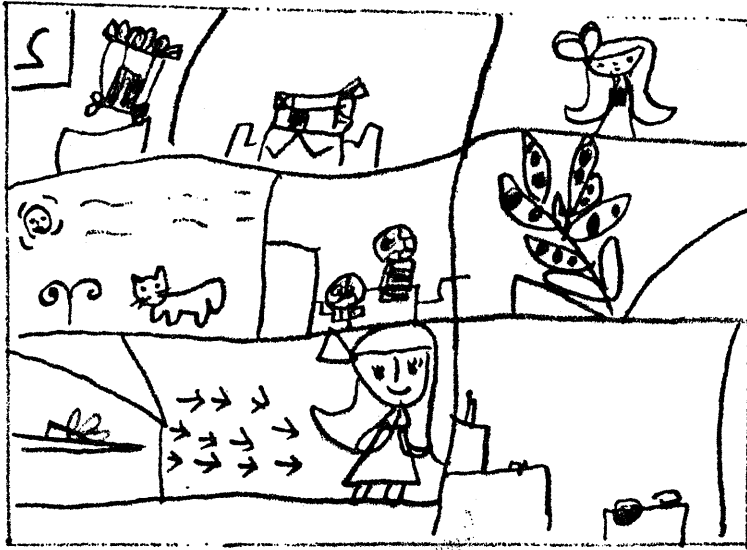
おばさん、こんにちは。(下段右)」

▼ 図 4 (1)



二枚目

「さ、学校からかえったら 工作しよう。(上段左)



◀
 4
 (2)



◀
 4
 (3)

でも きょうはだめか。ランドセルしょってるの。それならまたかえりましょう。おうちにかえったら、またおピアノか。やっぱりやめた。エレクトーンする。(ここんとこよと指さす 上段中)

まだごはんたべ中、また学校からかえってきたの ドア(下段右にとぶ)

もうお豆がなくなったかな、ちいちゃいお豆もなくなっちゃ。大きいお豆もなくなっちゃ。(中段右)

白金堂にいつて、風船かってこよう。何がほしいんですか。風船四つくださいな。あれ、四つじゃないよ。いいおまけ。さー、かえろう。ガラー(矢印をつける。下段左)道まちがえちゃったかな。あら、またもとにいつちゃった、また行ってみよう。あれ、おうちはうらだったかな。さー、おうちにかえろう。あー、もうおうちについてたのか。

いただきます。おかしい。おやつすぎてたのか。ごはんもすぎてたのか。おいしいものちょうだい。さあ、くるくるくる、ねむくなっちゃった。あれ、ねこちゃんかな。なあんだ、ミケかな。どうしよう。こんないいお天気じゃまぶしいな。(中段左)

三枚目

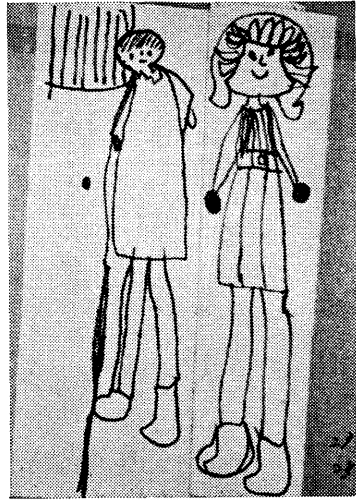
「フワフワ、ねむいや。そうだ、今日は遠足の日だった。いこ

う、プップー、バナナとってきちゃった、ほんと、おうちのおみやげにしよう。(下段右から左にかき、次に上段右から左に向ってかく)

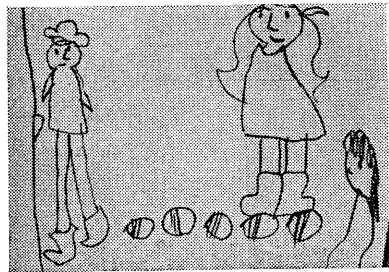
おうちかえろう。スヤスヤ、なんかあつい。あれ、びょうきだ、あそびすぎ。(上段左)

内と外の間を揺れ動く心

子どものことは通りに記したので、分りにくいところもある。全体としてのテーマは外出(おでかけ)であるが、家に帰るテーマがくり返し挿入され、最後には、「あれ、びょうきだ、あそびすぎ。」で終わっている。外に出てゆくことと、内に帰ることとの間を揺れ動いている子どもの心がうかがい知られる。外に出てゆくときには、二枚目の白金堂のはなしにみるように、道に迷ったりに、家に帰る道順の認識がはつきりしなかったりして、外出に伴う不安な心も示される。しかしまた、外出の途上で猫に出会う。この猫はYが家で親しんでいるミケである。家の外にも親しい友だちがいるし、楽しさがある。そこで全体として見れば、一枚目の冒頭にあるように、「おでかけ やっぱり 大すきだ」という外向きの心が主流となっている。



▲ 図 5 (1)



▲ 図 5 (2)

場合も同様のことが多く、最初遊びは
 じめたときよりも、時間がたつうち
 に、子どもの内心の課題が一層明瞭に
 あらわれてきて面白いと思うことがし
 ばしばである。この子どもは、いまや、
 外出のイメージをもって動きはじめた
 が、それは、内部との関連を自分で納
 得するまで揺れ動きながら探究するこ
 とによって、確かなものとされてゆく
 のであろう。

Yはこの三枚つづきを終ると、「いちばん面白いのどれ？ 白
 金堂のはなし？」ときく。道が分らなくなって、紙の裏側にはい
 けないのに、家は裏の方だったかと思ったり、戸外と家との関係
 がよほど気になっているようである。一枚目は外出のテーマとし
 ての筋が明瞭であるのに、二枚目以下になると、話としての脈絡
 も、一見、不明瞭になってくる。外出とは反対の内部のテーマと
 の関連を探して揺れ動いている心の状態が、脈絡の不明瞭さとな
 ってあらわれているのではないだろうか。子どもが自分から描き
 はじめた描画は、しばしば、一枚目よりも二枚目、三枚目とかい
 ているうちに、その子どもの心の内実があらわれてくる。遊びの

このころのYの描画には、内と外のテーマで描かれているもの
 が数多くある。あるときは内部のみ、あるときは外部のみ、また
 あるときは内と外の両者が描かれている。五歳三学期の描画から
 もう一枚だけ示してみようと思う。図5(1)(2)は、五歳三学期一月
 九日に描かれたものである。最初、画用紙を両側から折って人物
 を画いた。それから折った部分を左右に開いて描いたのが図5(2)
 である。説明を加えるまでもなく、扉を開いて外に出てゆく動作
 が描かれているのを見ることができよう。外出する人の足跡
 がはつきりと描かれている。内と外の関連を模索しながら外に出
 てゆくときには、無制約に外に飛び出したままにはならない。あ

るときには外に出、あるときには内に入り、その足跡は確かである。

熟成するイメージ

幼稚園で、皆の中に入ってゆく子どもと、ひとりでいる子どもとある。幼稚園にゆくのを嫌がる子どももある。それぞれの子どもは、時間の流れの中で見るならば、ある時期の現象である。おとなの頭は直線的に物事を考え易い。いま、外に出てゆくことを嫌がる子どもに、いまそれを許したら、いつまでも外に出てゆかないだろうと考えるのがおとなの頭である。そして、子どもは、もっと別のところで、静かに動き、何かに向って準備されつつあることに気が付かない。子どもがこれから先、長い間、自分自身の内側の課題として追求しつづける、その最初の根源的なイメージは幼児期にあると私は思う。子ども自身の心が納得するまで、幼児期なりにそれを探究し、熟成させる時間を子どもは欲しているのだと思う。昔だったら、いつまでも空の雲を眺め、土をいじり、往来をゆく人を見て過していた時期に、外からの課題と時間の枠に追われて過したら、この無形のたいせつな心の部分を硬化させてしまおうだろう。

それぞれの子どもが心の内に抱き、追求し、形をかえて反復してゆく心のイメージは、子どもによって異なる。ここでとり上げたのはひとりの子どもの例である。三十人の子どもがいれば、三十通りの個性がある。おとなにその全貌が明らかにされることはないが、子どもにふれるたびに、そのある部分を見せられる。だから、保育には、興味をつきることがない。興味をもって、子どもと楽しんでつき会うことのできたときには、その子どもの成長に手をかしているのであると思う。

幼児の心の中に抱いているイメージが熟成するときに、行動も次の位相に移ってゆく。保育者はその間何もしないで待っているのではない。そのときに子どもが楽しんでしていることに目をとめ、一日を子どもにとって満足のゆくものとしてゆくのである。幼稚園の時期に、その後長い間、折にふれて心の中に反復されるであろうような心のイメージがつくられる。この意味で幼児期は一生の中で特別な時期である。人間らしさのものがで上がる時である。五歳児の三学期も終りに近づいて、それぞれの子どもがのびやかに遊べるようになってきている姿を見るのは快い。それが幼稚園の時期の収穫であると思う。

(つづく)

今月は、「食べる」という行為に焦点を当てて、子どもの生を見直すことを試みた。

子どもにとって、口は、世界に対して開かれた窓である。一つは、言葉さながらの意味において、そして、いま一つは、譬喩的な意味においても、彼らは、口を通じて世界と出会うのだから。

赤ん坊が、唇に触れるものに吸いつくという能力によって自身の生存を確保し、唇の知力を駆使して外界を識別することは、周知のとおりである。しかも、彼らは、吸うことの快感を再現しようとして、余念なく唇の遊びをくり返し続ける。こうして、認識と遊びという、人の生き方を支える二つの糸が、唇を通じて形成されていく姿を見ると、子どもとは、まさしく、「口の文化」を生きる存在なのだと思えてくる。そのゆえに、子どもの世界の特性を、「食べる」という相においてとらえることは、意味深く、ま

た、興味深いことであらう。

確かに、子どもたちは、食欲なまでの食欲の持ち主である。外界は、彼らの食欲のままに次々と呑みこまれ、その内部に同化される。その上に、こうして「食べる」存在である子どもたちは、一方では「食べられる」ことを欲している。彼らは、しばしば、傍にいる大人に「も」を差し出すことがある。それは、子どもの作った小さな細工だったり、皿に盛られた泥団子だったりするが、それらを、大人たちが受けとり、ポケットに収め、或いは、口に運ぶふりをするとき、彼らの顔は、満ち足りた安堵で一杯になる。彼らは、それら小さなものを己れの分身として、愛する他者の前に差し出しているのだ。

「呑みこみ」「食べて」同化する子どもたちは、同時に、「食べられる」ことにより、他者との一体化を願う存在であると言えよう。

(本田和子)

幼児の教育 第七十九巻 第六号

六月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年五月二十五日 印刷
昭和五十五年六月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

フレーベル先生の遺跡を訪ね……ヨーロッパの自然とメルヘンのささにふれる旅

夏のヨーロッパ旅行

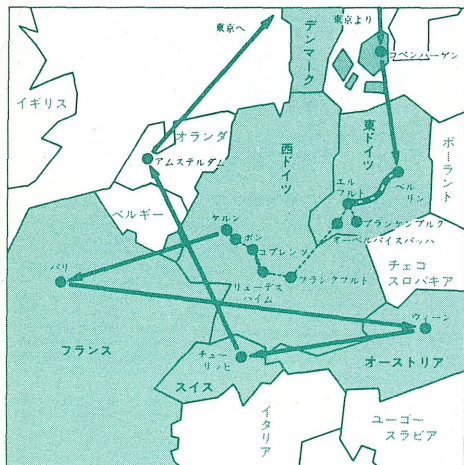
15 日間

8月10日～8月24日



フレーベル先生の生家

フレーベル先生の遺跡を訪ねて好評の“フレーベル・ツアー”も、ことして第5回を迎えます。いまでは、現地との友好のきずなもすっかり強くなりました。幼児教育のルーツをたどりながら、ヨーロッパの自然にふれ、メルヘンのさに遊ぶ素晴らしい旅に、ことしもお誘いいたします。



経路

東京→コペンハーゲン→東西ベルリン→エルフルト→バートブランケンブルク→オーベルバイスパッハ→フランクフルト→リュエデスハイム→ボン・ケルン→パリ→ウィーン→チューリッヒ→アムステルダム経由東京

期間

昭和55年8月10日(日)～8月24日(日)

費用

667,000円 (ローンも可能です)

申込〆切

昭和55年6月20日(金)

人員

30名 (定員になり次第〆切らせていただきます)

主催 フレーベル館現代幼児教育研究会 日本交通公社団体旅行新宿支店

●お問い合わせは、もよりのフレーベル館販売店、もしくはフレーベル館本社へどうぞ。資料をお届けいたします。

キンダーブックの なつのおともだち

各 定価220円 A4判ワイド

お母さんと一緒に、のびのび楽しい夏休み!!



① 年少用

●付録「なつのせいかつ」(生活表)
「せいかつシール」
きぬいとそうのたね



② 年中用

●付録「なつのせいかつ」(生活表)
「せいかつシール」
きぬいとそうのたね



③ 年長用

●付録「なつのせいかつ」(生活表)
「せいかつシール」
きぬいとそうのたね

☆もよりの代理店・支社・支店・営業所・特約店へお申し込みください。

フレール館